大空煌めく淡い羽根

鳥籠のカナリア

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

心の奥底では他人に心を許していない二人が、お互いを赦すまで。

目次

第一章：「明けの明星」

きっかけ　1
におい　10
れんらく　17
ゆめみ　26
すいぞくかん　35
やさしさ　44
ぬくもり　53
とうばん　62
じかん　72
こうかい　80
かんぺきさ　86

えがおのうら　95
あかつき　103

第二章：「未定の旅路」

おつきあい　112
あんしん　121
まどろみ　130
いまとむかし　138
こすぶれ／やどりぎ　151
やさしさのきおく　161
かわれている？　167

第三章：「誰がための想い」

おとをたてて　173

第一章：「明けの明星」きっかけ

シャーレの先生、と呼ばれる存在に腰を据えてから少し経った。

新緑が深い緑になる程度の時間をここで過ごして知ったのは、教職はブラックで、金でやると長続きしないと言われるのにも納得がいくくらい面倒が目立つこと。

普通の社会人なら薄い付き合いで済むところを、深いところまで踏み込まなければならない。なにせ学生にとって先生というのは良くも悪くも注目の的だ。

この世界の大人はクソッタレしか居ないことはもちろん、普段は上手いこと真人間に擬態しているから生徒からの反応も良好。……そのせいか、空き時間が生徒に侵略されるのは嬉しいやら悲しいやら。

シャーレのオフィスの窓から空を眺める。あの空は、これからやらなければいけないこと思わせる程度に遥か遠く、かと思えば吹く風はその過程で得られる関係性を暗示しているかのように優しい。

目を閉じ、ジャケットの裏側をまさぐって手にするのは、タバコ。現代においては有害物質の塊とされるそれに火をつけて、口に咥えた。これを吸っている時だけは、誰に

でもいい顔をする必要がある先生という重責から解放されているような感覚に浮足立つ。

最近、頭を悩ませている生徒が一人居る。

いや、頭を悩ませているだけであれば数えきれないほど居るが、その中でも俺にとっての天敵が一人居る。

「あれ～、先生。こんなとこでタバコ吸ってて、いいのかな～?」

「うるせぇタカナシ。大人だからいいんだよ」

ノックをすることもなく、悩みの種が入ってくる。

小鳥遊ホシノ。

潰れかけていたアビドスを先がないことを知りつつも延命させ、最後には諦めて勝手な行動に走った生徒(困ったちゃん)。

ふんわりとしたロングヘアーは、本人の雰囲気とマッチしていて絵になる。

乱暴な物言いをされているのに、どこか嬉しそうにも見える。

「そっか～。おじさんも吸っちゃおうかな?」

「バカ言え。俺がタイホされちまうだろうが」

近付いてこようとするタカナシを視線だけで静止させる。にへら、と軽薄にも見える笑みの裏ではなにを考えてるのか。きっとダメな大人、とでも思われてるんだろう。

お前の頭頂部についてるアホ毛引き抜いてやろうか。
「じゃあおじさんは子供だからソファ借りるね？」
「オメー……」
「今の先生の姿、他のみんなが見たらどう思うかな～？」
「……はぁ。好きにしろよもう」
今の口が悪く、タバコも吸って、表情も険しい姿を他の生徒に見られようものなら社会的地位は地の底に落ちる。最悪権利が剥奪される危険すらあるから強くも出れない。
知られてる時点で地の底に落ちてる事実は知らない。大人は時に見なかったことにすることも肝要なのだ。
窓の外に手を伸ばして、室内にニオイが流れ込みそうにないことを確認して吸い続ける。
「なんかさ、タバコ吸ってる先生って絵になるよね」
「そりゃどうも。部屋に入ってくるときのお前もなかなかだったぞ」
「うぇっ!?」
ぼんっ、と爆発でもしたかのように髪が逆立ち、慈雨のように優しく降る。
「ほら、おじさんなんて可愛げのかの字もないじゃん。先生なら選り取り見取り！」
「まぁ、確かにな……」

顔だけなら好みの女はまぁまぁ居る。というかキヴォトスはどいつもこいつも顔面偏差値が高い。問題は性格が終わってること。

「なんか肯定されるのも複雑だねぇ～……」

「ただ、周囲のレベルが高いからって良いと思ったものを褒めないのも……ちげぇだろ」

背後を見るのが億劫で、遠方に見える水平線を見る。

「……あの日も確か、こんな感じだったか」

ただここではない場所で羽を休めたくて、現実逃避にタバコを吸っていたあの日、他の生徒とは違う関係性が、始まったのだろう。

この話をする前に、ハッキリと言えることがある。俺は小鳥遊ホシノという人間が苦手だ。それは最年長のクセに一人だけ能天気にソファで寝転がっていたことが原因。

こいつはある種の偏見になってくるが、この手の意図的にのんびりを演じているタイプは過去になにかある。それはその後付き合っていく中で、清濁併せ？み、後輩に対して注意する場面などを通してそのうち確信に変わっていくことになる。

苦手というよりは面倒、というのが先生としてではなく、俺個人としての見解だった。

子供のクセになんでも分かったような顔して突っ走るバカが一番手間がかかるな、と

アビドスの一件を終えてからの感想。

そんな一生に一度あるかどうかの大事件ばかり起こるキヴォトスにおいて、先生という立場の重責は重い。

人生二週目でも思い通りにいかずに中々堪えることも多かった。それで逃げた先が、タバコ。一般的に悪いとされていることをやるときは、背徳的な高揚感が胸中を満たす。

酒も悪くはないが……どこか容認されている雰囲気がどうにも好きになれない。

「はぁぁぁぁ〜〜〜……」

その日も確か、思った通りに出来ず苛立ち混じりに窓際でタバコを吸っていたのだったか。

「どいつもこいつも手間がかかるなコンチクショウ」

子供はそういうもの。頭では分かっていても限度がある。一人ひとりに対しては許容できるものもあるが、積み重ねられれば崩壊していく。

「手間がかからないのも考えものだが……」

高校生のときなんて変に悟って自分の可能性を潰すのが一番マズいんだ。ソースは俺。ロクな人間にならない。

「その中でもホシノはなぁ……」

ありゃ、ダメだ。全容を知っているわけではないが、過去あったことが関係して諦め

てるフシがある。あの手の人間は、優しすぎる。自分の手でなんとかしようとしてしまう。

「おじさんがどうかした？」

「は？」

驚いて振り返ると、考えていた相手が居た。噂をすれば影が差す、なんて誰が言ったのか。

「先生も大人なんだねぇ～」

俺が右手に持ったタバコを見ながら、面白いおもちゃを見つけたような笑顔を浮かべるホシノに冷や汗。

いや、ホシノだからじゃない。生徒にオフの時の姿を見られるのがマズイのだ。客先で素を出すやつがどこに居るのか。咄嗟に普段の仮面を被り直す。

「……やぁ、ホシノ。俺だって大人だからね。ストレス発散手段の一つとして、タバコを使うことくらいあるよ」

「先生って普段私って話してた気がするけどな」

「あ～……っと」

ちょっとミスったらしい。いや茶目っ気出してる場合じゃない。マジでマズい。

ただ、ほぼバレている状況で誤魔化すのは難しい。

「ホシノ？　先生とちょっとお話しようか」
「うん、いいよ？　よいしょっと」
　こちらが言うまでもなく、備え付けのソファに沈み込んで恍惚の表情を浮かべているホシノを先生としては怒るべきなんだろうが……あいにく、今先生業はお休みだ。
「やってられんな……」
「お邪魔だった？」
「邪魔だったわけではないよ。ただ、タイミングが悪かっただけで」
　それに限ってはこいつに非はないだろう。今度から鍵をかけるなり、別室を用意するなどすればいい。ホシノは人の秘密を話すタイプでもない。問題は、なにを要求されるか。
「……それで、なにをすれば黙っててくれるかな？」
「んー……おじさんとしては、休憩場所にさせてほしいかなって」
「シャーレを？」
「うん。今はアビドスも安心だからさ。やぁ、大人の力ってすごいんだねぇ」
「大人がすごいってわけでもないけどね」
　ホシノがいつか、大人を信じられなくなったように。大人は子供よりも残酷に裏切るものだ。それが裏切りだと、気付きもせずに。

「それだけ？」
　言ってはなんだがこっちが得られるメリットの方が大きい。それだけホシノが、このことをどうでもいいと思っているだけかもしれないが。
　まだ要求していいのか、と視線で問われたので構わない、と返すと悩ましげな声を少し出したあとに。
「その喋り方さ」
「うん」
「本来の先生じゃないでしょ」
　なんとなく、言いたいことが分かる。ようは本来の自分で居てくれということだろう。
「……つまり、本来の喋り方をしろと？」
「そういうこと～」
　流石に生徒の前で……いや、シャーレでは中身を出さないようにしていたのだが。自己催眠は大人の嗜みだ。
「……二人のときなら」
　考えたあとの、妥協案。定着したイメージというのは厄介だ。そうであることを無意識下に期待されていて、それと違えば幻滅される。口調、仕草、その他諸々。

ホシノが寛容なだけだ。
「うへへ、なんかトクベツなカンケーみたいだ」
「バカ言え。本来はこっちでした、なんてジョークかなにかだと思われるのがオチだ」
「……」
呆気に取られたように口を開けるホシノに苦笑する。まぁ、こんなものだよなと。
「はぁ……中身出せって言ったのはタカナシだろうが」
「ちょっとびっくりしちゃって」
ぱちくり、と何度かマバタキしたあとにニンマリと笑う。その表情には否定的なものは見えない。
「うん、そっちのセンセイの方がいいかも」
「……そりゃどうも」
自分の口から溜息をひとつ。これはなんの溜息だろうか。最近は溜息を吐かないようにしていたからか、よく分からない。
ただ、マイナスの感情でもないのだろうということだけはなんとなく分かった。
「じゃあ、これからよろしく～」
「よろしくしたくねぇがな……」
柔らかな笑顔が、どうにも居心地が悪く感じて、また新しくタバコを咥えた。

におい

プルースト効果、というものが脳科学に存在する。文学作品において定番であるソレは、匂いが妙に記憶に残る想い出と繋がる現象であるが、人の匂いというのは意外にも覚えているものである。

桜の香りで青春を思い出したりとか、そういうの。

五感の中でも脳に直結しているからだとかいう理由だった気がするが、分かりやすいものだと人のニオイ、だろう。

「そういえば、先生ってタバコ吸ってるのにニオイしないよね」

「……ニオイしたらバレるだろ」

いつも通り執務で溜まったストレスをタバコで発散していると、不意にタカナシがそんなことを言ってきた。

服にニオイが付くものは多いが、その中でも不快度が高いのがタバコのニオイ。喫煙者も人のタバコのニオイで気分悪くなることはあるため、非喫煙者がどんな思いをしているかは……察するところ余りある。

シャーレの先生、というのはいい評価を受けている。それこそ、過分なほどに。人に

対する評価は言動のみでなく、身だしなみ……ようは、マナーでも決まる。その中でもにおいは記憶に残りやすいものとされている。

だからニオイには気を付けている、というわけだ。

同様にコーヒーもそんなに好きじゃない。コーヒーとタバコは化学反応を起こしてテロにまでなる。

「ね、そっち行ってもいい？」

「タバコのニオイ移るからダメ」

「移ってもいいんだけどなぁ」

「いいわけあるか」

生徒からタバコのニオイがしようものなら教育者として叱らなければならないし、じゃあ誰につけられたニオイなのかという話になればまた面倒なことになる。

面倒事は増やさないに限る。

とことこ、と近付いてくるタカナシに嫌な顔をするのが自分で分かる。おそらく、先生がしてはいけない表情をしていることだろう。

「なぁタカナシ。お前人の話聞いてたか？」

「んー、ちゃんと聞いてるよ～？」

「聞いてるやつはこっち来ねぇんだわ」

急いでタバコの火を消しても、辺りに充満したタバコのニオイは消えない。溜息を吐いて呆れた視線を向けても気の抜けた笑顔を向けられて怒る気力も失せる。

そもそも弱みを握られている状態で苦言を口に出来るわけもない。南無三。

そのまま隣にまで来て、何度か鼻を動かし……露骨に嫌そうな顔をする。

「んへぇ……あんまりいいニオイじゃないね」

「まぁ、そりゃ有害物質のカタマリだからな」

間違ってもタバコなんて吸うべきじゃない。タバコは思われているよりカッコいいモンじゃないんだから。

これはただの、大人の世界を生き抜くための処世術。憧れるような美しさはどこにもなく、あるのは現実から一時的に逃れる快楽だけ。

興味津々、といった様子でタバコを見るタカナシは、大人に憧れる歳相応の子供に見えた。それだけの目が、出来るようになったかと頬が緩む。

「タバコって美味しいの？」

「いやクソまじぃ。なんでこんなの吸ってんだろうな……」

「えぇ……？」

一番最初に吸った頃はバカみたいに深呼吸するものだと思って大失敗したし、しかもそれがメンソールで二度と吸うかと本気で思ったのに、今では手放せなくなっている。

最近は忙しさも隠せなくなって正比例するように吸う回数も多くなってきている。このままでは隠せなくなっていくだろう。

滅びろ紙書類。廃れろ旧体制。

一番書類の溜まっていた日が脳裏に浮かび、嫌な想像に溜息を吐く。

「大人はそれだけイロイロあんのさ。こんな大人にはなんなよ」

「反面教師にさせてもらおっかな～」

「……素直に言われるとなんか腹が立つな」

子供は素直が一番、とはよく言うが。それはそれ、これはこれ。よそはよそ、うちはうち。正直さは美徳だが人を傷付けるものだ。

今それなりに傷付いた。

「ほら、いいモンじゃないって分かったならさっさと戻りな」

「んー、でもなんか落ち着くんだよねぇ～」

「なんでだよ」

普通嫌なニオイがするなら落ち着かないだろう。

「タバコの匂いじゃなくて……なんだろ、これ」

「さぁ……そこら辺に置いてあるフレグランスとかじゃないのか？」

強烈なニオイ同士で悪魔合体しないように香りに気を付けているが、同じ空間ならば

どうしても混じる。そうなれば普段住んでいる俺では分からない。
「んー、でも先生の近くからするんだよ？」
「そうかぁ。じゃあ俺のにおいかもしれないな」
「そっか～。先生の匂いだったか～」
　得心したように何度か頷いてから――顔を真っ赤にして固まる。
「……どうかしたか？」
「んえぇ!?」
　声をかけると、驚いた猫のように跳ね上がってから全力で後退していく。……やはりタバコ臭かったのかもしれない。
　本人が言わないだけで気にしていることは世の中にたくさんある。
「……そんな慌てるようなことなかったろ」
「えっと、いやぁ～」
　なはは、と誤魔化すような笑って一定の距離を保たれてしまう。
　離れたり近付いたり忙しい。
「……ふむ？」
　不思議に思いつつも、乙女はそういうものなのだろう。深くは触れずにタバコを片付けて、棚においてある匂い消しを服につけておく。

タバコのニオイを残したくないのでしばらく換気。夏に近く少し熱く感じるが、体裁を保つ上では仕方がないと妥協する。

お色直しをして、椅子に腰掛けるとタカナシが近付いてくる。

「……」

「……？」

ふわり、と香る優しい匂いが鼻孔をくすぐる。なぜに横に立っているのか。

なにをするでもなくただ横に並ぶ彼女をよく観察する。

どことなくよそよそしい様子に首を傾げて――まあいいかと書類の処理を始める。

いつになったら終わるんだこれ、とげんなりする。

「そういえば、戻らなくても平気なのか？」

彼女が来てから既に2時間ほど。人の家に居るのには短い時間だが、シャーレに居座る時間としては長い。どいつもこいつも嵐のように過ぎ去るからではあるのだが……。

本当にゆっくりしているだけのタカナシに疑問が残る。人を疑うのは悪徳だ、なんて精神があるが……現実は物語のように分かりやすく出来ていない。だからこそ不思議で仕方がない。

「みんなには言ってきてあるから大丈夫」

「……そうかい。そりゃ重畳」

しばらくの間タカナシを観察して分かったのは、こいつが俺の中身について本当に関心がないこと。

より正確に言うなら、それを使ってどうこうしようとは思っていない。

まるで、本当にあの約束だけが意味を持つのだというように。

俺は、小鳥遊ホシノが苦手だ。心の底から。苦手は嫌いとは繋がらない自分の脳みそにほとほと呆れつつも、なにも言えなかった。

「そういや……」

いい匂いと恋愛に関係性があったような気がする。なんだったろうか……としばらく考えて思い出せなかったので諦めることにした。

どうせ、今の自分には関係のない話なのだから。

れんらく

「あ～……やる気出ねぇ……」

こうも毎日デスクワークばかりだと景色が変わらず面白くない。書類の内容自体は全て違うが、やっている処理自体は一緒だ。精査して、判を押す。代わり映えしない日常はキヴォトスに来てからは貴重な機会だ。

貴重な機会、のはずだ。

椅子にもたれたまま伸びをして、これからやるべきことを考える。思考に靄がかかったように脳が機能していないことに溜息を吐いて立ち上がる。

「……シャワーでも浴びるか」

シャーレは職場兼住居。ちょっと区画を移動すればパブリックからプライベートへと。徒歩1分以内の立地には羨望の眼差しが向きそうなものだが、バランスというのは大事なもので。

端的に言えば本当にプライベートが確保されているかは怪しい。

パパっと服を脱いで、普段から付けっぱなしのメガネを外してからシャワールームでバルブを捻る。

「っ……。はあぁぁぁぁぁ……」

気が抜ける。シャワールームばかりはプライベートが確保されていると信じることが出来る。なにをするでもなく、ただただ天井を仰いで温水を全身に浴びていると自然と頭が現実に追い付いてくる。この感覚が、たまらなく好きだ。

一通り終わらせてシャワーを出て、適度なスキンケアついでに髪を乾かす。ワックスは……まぁ、一旦いいかと区切りを付けた。スーツもズボンとシャツだけ着て、ジャケットとネクタイを手に持ってから執務室に戻る。

机に戻って、溜息。勢いのまま胸中の想いを叫ぶ。

「仕事、やりたく、ねぇ！」

独り言が増えたのはいつからだったろうか。それこそ、明確なストレスを感じ始めたあたりだった気がする。怒りのコントロールはある程度出来ている。誰かに見せてはいない。

ただ、そのうち限界が来ることは目に見えている。まだ、狂うわけにはいかないのに。

「おー、先生。お邪魔してる……よ……？」

「あ～……」

いつも通り入ってきたタカナシを認識するまで数秒、固まることもう数秒。

気まずげに逸らされた横顔に申し訳なさが込み上がりつつも、たっぷり15秒ほどか

けて目の前の光景を整理して。どうしようもないので諦めを含んだ五体投地。
やべぇ床超気持ちいい。床と同化したい。
「せ……先生……!?」
「煮るなり焼くなり、お好きにどうぞ……」
現場見られたらどうしようもない。残骸とかなら前に来た人間がやったと誤魔化しが利くが、難しい。
「諦め早すぎない!?」
「まぁ、職場でするような格好ではない時点でなぁ……」
諦観を含みつつも、まぁ大したことにもならないだろうという楽観が含まれていることに自分で驚く。
生徒である以上はある程度のワガママを通させるのが大人である自分の仕事で、それが弱みを握られている関係であろうと変わらない。
ましてやタカナシは自己表現がヘタクソで、ワガママを押し通せないタイプなのだからいい機会になればいい――。
「ほら、立って立って～。もう、その様子じゃお風呂入ったばっかりでしょ？」
「あぁ……」
「汚れちゃダメじゃん？」

「おう……」
　生返事をしつつ立ち上がると、服の前面についたホコリを払い落としてくれる。
「ダメな大人だわ俺」
「えぇ……？」
　優しさが辛い。ちょっと涙が出そうになりながら、誰か入ってこないように電子ロックだけしておく。この世界はハッキングや爆破上等だが、逆に言えばそれ以外は懸念しなくていい。
　いや、それを懸念しなければならない時点でおかしいのでは？
　これで少しの間は来ないだろう。
「はぁ……タカナシ、黙っててくれるか？」
「それは先生の態度次第だとおじさんは思うよ」
「ごもっとも」
　オフィス内にある姿見で、自分の姿を確認する。普段ハーフアップショートにしている髪はだらりと垂れ、陰気さを隠せない、普段使いのメガネも浴室に置いたままだったことを忘れてかけていないためか、心なしか表情が険しいのが自分で分かる。
　見る人や地域によっては、ちょっとした自由業だと思われてしまうかもしれない。
　こんな状態で他の生徒が来るなら嫌われるか心配されるか――一部の特殊な人間は

目を輝かせてくるだろう。どちらにせよ面倒でしかない。
「先生〜」
「あ〟？」
いつもより心なしかドスの利いた声で返事して振り返ると、シャッター音。
嫌な予感がしてタカナシの持っているものを見ると、そこにはスマホ。
「ちょ……おま……」
「へぇ〜……お宝だぁ。先生ってオフの時こんな顔してるんだ」
「……悪人面で悪かったな」
ちょっと気にしているから普段取り繕っているのに。
「うーん……おじさんは嫌いじゃない、かも？」
「それは……よかったな……？」
さっさと消してほしい気持ちはあるものの、画面を見つめて動かないタカナシを邪魔するのも忍びなく、デスクの引き出しから予備のメガネを取り出す。
「先生ってメガネかけなくても見えるの？」
「ああ、これ伊達メガネだからな」
タバコと同様に、大人の体裁を守るための道具。普段の目つきを誤魔化し、嫌われないための処世術。それで実際人当たりがよくなっているのだから効果は折り紙付き。

問題はメガネに悪戯されそうになることだが、こればかりは仕方がない。
メガネキャラはメガネが本体だから。
「……」
ずっと黙っているタカナシの視線は何度も俺の顔と画面を確かめるように往復している。
「……普段からこっちだったらいいのに」
「それこそ印象最悪だろうよ」
「うえぇ!?　普通そこは聞こえないとこでしょ！」
「お前この距離でそんな都合よく聞こえねぇわけないだろ」
関係性を進展させたくないときや相手の様子を見て反応するべきでないとき以外に反応しないだけで。
頬を赤らめているタカナシに対して、
「お前悪い男に引っかかりそうだよなぁ……」
「なんで?」
「ゲマトリアのカス黒服がソース」
あれをカウントするのもどうかと思うが、普段疑い深い人間ほど甘言には惑わされるものだ。

「その名前を出されると私も否定できないかも」
「お前次やったらただで済むと思うなよ」
メガネを外して睨み付けるとぼんやりとこちらを見てはいるが、聞こえているのだろうか。
「返事は？」
「う……うん……」
本当に分かっているのかと不安になるが、返事したなら多分聞こえているんだろう。聞こえてなかったら知らん。有言実行するのは変わらないのだから。
「あと、来るときは連絡しろ。もてなしも出来ねぇ」
「いいのいいの、おじさんにそんな気を使わないのが一番なんだから～」
「使うわ女の子なんだから」
女の子、という言葉はどうにも気恥ずかしい。タカナシも思うところがあるのか、驚いた表情のまま固まっている。
実際のところは心臓に悪いからという話なのだが。
「えーっとぉ……おじさんのこと、女の子だと思ってみてる？」
「そりゃあなぁ……」
思うもなにも、事実女の子だろうに。

「……いや待て。俺たち連絡先交換してねぇな」
「え？　モモトークがあるじゃん？」
「いやそっちじゃなくて……」
　普段使っている端末ではなく、もっぱら私用でしか使われていない。タブレット端末でモモトークを起動してＱＲコードを表示する。
「ほれ、スマホかざせ」
「え、あ、うん……」
　タブレットにスマホがかざされ、連絡先がなかった欄にホシノ、という名前が追加される。
「これでよし。通知埋もれることもないだろうし、来るときはこっちのアカウントにしてくれ」
「えっと……来るとき以外は……？」
「来るとき以外もこっちでいい。ただ、言わないように」
　別のアカウントで繋がっているとなれば面倒だからな。どうしてもトクベツ扱いしているような形になることもあるし。
「それはもちろん。おじさんは口が堅いんだよ～？」
「自分のことも言わねぇがな」

「そ、それはいいっこなしじゃん。……えへへ～」

俺の連絡先を渡しただけなのに彼女はどこか幸せそうで、なんとも言えなくなって仕事に戻った。

ゆめみ

毎日、ある夢を見る。まるで忘れてはいけないものかのように見せられるソレは、キヴォトスによく似た狂気的なまでに美しい空を背景に進み続ける電車と、それに揺られながらも目の前に居る血まみれの少女と会話する夢。

その夢は決まって自分と目の前の少女が血だらけで、後悔を滲ませる表情をしながらも互いに笑っていた。

その少女とは本音で語り合った気がする。先生としての振る舞いではなく、個人的に仲の良い友人であるかのような距離感。その時の俺は、きっとその距離感が心地よくて——だからこそ、失ってしまった。

「先生、あなたになら、私の信じられる大人であるあなたになら——」

「■■■——」

俺は、夢の中に囚われているのだろうか。

「——っ!?」

その日の夢見は、最悪だった。寝起きの頭に冷水をかけられたかのような、そんな不快感に歯噛みする。いつもなら寝起きよくベットから出られる都合の良い身体も、この不快感の前には無力のようだ。

せめて二度寝しないように上体を起こしてベットに腰掛けるような形で態勢を変える。

ただ、それまでしか動かせなかった。それ以上は動けなかった。手を伸ばせたはずのものに届かなかったと、そればかりが頭の中を占領している。

ただ、俺の記憶ではない――はずなのだ。これまでそんな経験をした覚えはないのだから。それでも何度も夢に見るのは意味があるのかもしれないが。

「……はぁ」

どことなく重く、鈍痛のする頭を目覚めさせるために深呼吸。思うようにシャキッとしない脳みそに疑問を抱きながら、朝食の準備をする。

パンにサラダ、スクランブルエッグにベーコン。朝にしてはちょうどいい食事で、一日の予定を考える。今日は仕事だけだ。それもそう長い時間取られる予定はないから、昼過ぎまでには上がれるかもしれない。

「……？」

ピロン、とモモトークの受信音。スマホを出して、通知がないことに首をかしげる。

はて、今の通知は誰の端末だったのだろうか。
そう思いながら一応タブレット端末をチェックしてみると、そこにはホシノ、という名前。
「タカナシか」
そういえば、この前連絡先を渡した気がする。生徒と連絡するパブリック用ではなく、休暇だと決めてスマホを部屋の隅に放り投げる時の、プライベートアカウント。
現状このアカウントに登録されているのは、タカナシだけだ。
これ以降増やすこともないだろう。秘密とは、秘められているからこそ秘密なのだ。数が増えるにつれて体をなさなくなる。
《ｌｅｆｔ》ｍｏｍｏｔａｌｋ《／ｌｅｆｔ》×
《ｌｅｆｔ》ホシノ《／ｌｅｆｔ》
《ｌｅｆｔ》　今日シャーレに行ってもいーい？　《／ｌｅｆｔ》

大丈夫、ゆっくり来てね

《ｌｅｆｔ》ホシノ《／ｌｅｆｔ》
《ｌｅｆｔ》　まるで先生じゃないみたいだね～。風邪でも引いた？
《／ｌｅｆｔ》

じゃあ危なくなりながら来い

《ｌｅｆｔ》ホシノ《／ｌｅｆｔ》

もぉ～、冗談だって。じゃあお昼くらいに行くね

《ｌｅｆｔ》

《／ｌｅｆｔ》

しばくぞお前、と独り言つ。こっちは他の人間に見られても大丈夫なように発言しているだけなのに。

タカナシに気を許しすぎているような気もするのだが、どうにもこの関係性が好ましいと思ってしまっている。シャーレの生徒ですら出さない貌。能面の裏に隠された本当を受け入れてくれるのは、ストレス緩和の効果があるのかもしれない。

それは知らず知らずのうちにストレスを溜め込んでいたということの裏返しにもなるのだが心当たりは――あった。タバコとかソレだ。一瞬でも目を背けてしまいそうになった自分に呆れる。

気付かないフリは昔から得意だ。困ったことに。

「まずは仕事片付けないとだな……」

とりあえず昼までには終わらせよう。食器を片付けて、手早く洗ってしまう。さっきから微妙な違和感が拭えない。普段と比べて頭の動きが悪い。

最悪倒れてもいいように、動けるうちに出来ることをしなくては。そう思って急いで仕事を終わらせると、昼よりはちょっと前。

身体が少し重い気がして机に突っ伏してみると、机の冷たさが妙に心地いい。このまま寝たら、気持ちがいいのだろうな……。

「……い」

声がした。誰かに呼ばれているような気はするが、微睡みが心地よくて無視する。起きたくないのだこっちは。

「……せ……い」

今度は身体を揺すられてしまう。流石にそこまでされると起きないわけにもいかず、渋々重い瞼を開くと、目の前にタカナシが居て現実に引き戻される。

「……なんだよ」

「もう、せっかく連絡したのに寝てるなんて酷いと思うな～？」

「……そうだったな。悪い」

「先生、声おかしいけど大丈夫？」

はて、そんなにおかしいだろうかと発声練習してみると、声を出すのに違和感がある。言われて初めて気が付いた。

もっとも、痛みがあるほどではないものの明らかに風邪だろう。朝の倦怠感の正体は

風邪だったか……。
　額に手を当ててみると、いつもに比べて温度が高い気がする。普段手先が冷えることに苦悩しているが、こういうときは便利なものだと関心してしまう。
「無理せず休んだ方がいいんじゃない？」
「そうする……悪いな……」
　思ったより険しい表情をしていたのか、覗き込んでくる瞳からは心配の色が見える。
「ほら、おじさんに任せて？」
「ああ……」
　……弱っているときは感覚が鋭敏になると聞いたことがあるが、実際そうらしい。触れた手が妙に柔らかく感じて何度か握り直してしまう。
「は……運ぶよ～……？　どっち？」
「あー、そっち……」
　ぷるぷると震えるタカナシを意図的に無視しながら、シャーレの廊下を普段の3倍ほどの時間をかけて進む。
　身長差のせいでこちらが腰を落としているが、不思議と辛さはない。上手いこと負担がかからないようにしてくれているのだろうと、思考力が鈍くなり始めている頭で考える。

タカナシに引きずられてベットに到着すると同時に、折りたたんだ毛布の間に足を滑り込ませて動けなくなる。思いのほか限界だったらしい。

「タカナシ……」

「どうしたの？」

「相手、出来なくて悪いな……」

驚いた表情のタカナシを見て申し訳なさが込み上げてくる。病は気からとはよく言うが、普段口にしないことまで口にしてしまうらしい。

普段はもっと、完璧を演じている。ある程度の欠点がありつつも、それらは意図された美しい欠点。今回のような突発的なことは出来るだけ起きないようにリスクヘッジをしていたにも関わらず、この体たらくだ。

そんな俺に、彼女は毛布をかけてから額に手を当てる。

「先生は頑張りすぎじゃないかな～」

「お前ほどじゃ、ない……」

そう、タカナシほどじゃない。人の死を経験しても、諦観を含みつつも決して逃げることだけはしなかったお前ほどは。俺はたまたま間に合っただけだ。

もし、少しでも間違えていたならきっと助けることすら出来なかったのだから。

定期的に小言を言っているが、本来ならばもっと褒めるべきなのだ。

よく頑張ったね、と。

「そんなことないよ。だって、毎日遅くまで仕事しても弱音一つ零さずに私たちと向き合ってくれるでしょ～？」

「それが、大人の務めだからな……」

君たちの頑張りと、俺のような中途半端に大人になってしまった人間のものは違う。

だから、君たちは誇っていいんだと。ただ、重くなった唇は音すら発してくれない。

「だからね、先生――ありがとう」

いつもと違うハッキリとした口調に、まるで餌を得た稚魚のように口を何度も開閉する。シャーレに来てから、ここまで他人の言葉に感じるものがあっただろうか。

動きそうになる心を必死に押さえつけてただ一言。

「……ああ」

こちらこそ、とも言えずに。でも、それがなんだか尊いようなものな気がして。心が温かくなる。安心してしまったのか、瞼が鉛のように重く感じて抗おうとしても身体は正直なもので静かに閉じていく。

「……おやすみ、先生」

微睡む意識の中で手に触れた温かい感触は、心の弱さが生み出した願望なのか、それとも――。その判断なんてつかないまま、意識を手放した。

すいぞくかん

風邪を引いた日からしばらく経った。

人間の身体は丈夫なもので、半日寝ていたら治った。

幸いにも仕事が終わらせていたからタカナシ以外に体調を崩していたと悟られることもなかった。それ以外になんの問題もないのだが……。

「むしろ問題はそこなんだよなぁ……」

溜息と一緒に苦悩が漏れる。あれからタカナシは熱心に看病をしてくれた。寝汗を拭いてもらうのだけは遠慮したが、夜になって帰るまでずっとそばに居て、俺を眺めていた。

あの瞳に映る色がなんだったのか、倦怠感と頭痛でごちゃごちゃした脳では判断がつかなかったが……呆れられていなければいいなと思う。タカナシがそういうタイプでないにせよ、不安なものは不安なのだ。

他人のことならある程度察しがつく。ただ、自分が絡むとからっきし。同じ脳であることを疑いたくなるほどの体たらくに呆れを通り越して諦めが来る。

「不安、ねぇ……」

最近、少しおかしい。一人で居ると、どうにもタカナシの顔が浮かんでくる。あの、のほほんとして、なんにも考えていなさそうなアホ面が。その裏に隠された諦観を感じさせないあの振る舞いが。

先生として振舞っている間は生徒たちのことばかり考えているのは当然のことだ。とはいえ、生徒の数は多い。全員と関われているわけではないし、その上で関わっている生徒の数も地方の公立校一学年分くらいの人数だ。

だから、出来るだけ一緒に居るときはその子のことだけを考え、一緒に居ないときは考えないようにしている。現在進行形で関わっていることに関連している子を推察するときには考えるが、それだけだ。

「ほんと、どうしちまったんだかなぁ……」

これでは公平であるべき先生としての振る舞いに問題が出る日も近いかもしれない。

考えながら、今日の巡回場所であるシャーレ付近のストリートを歩く。各地域の情勢は信頼できる筋から上がってくるものの、自分で見ないと分からないことは多く、意図的に隠されているものも少なくない。

それでもシャーレ近辺は別だ。ほとんど散歩と変わらないため、頭の中は先生としてのものではない。

シャーレの付近に居るのは要件のある人間だけ。そんな人間のうちの一人である人

物が、端末と睨めっこしているのを発見する。
　そのまま立ち去ろうかとも思ったが、あとが面倒だと思い声をかける。それと同時に頭を生徒と会話するときのものに切替る。
　声をかけられた人物は眉間によっていたしわがなくなり、柔らかい笑顔を返してくれる。
「やぁこんにちは」
「あら。こんにちは、先生。こんなところでどうされました?」
「なに、ちょっとした散歩ってところだよ」
　小言を言ってくる女代表、ユウカ。ミレニアムのセミナーに属する会計で、彼女に助けられた機会も少なくない。ただ、安心出来る相手かと言われればそうではない。
　尻を叩かれる母親のような人間性は個人的に嫌いではないが。
　腰に下げられたサブマシンガン――ＭＰＸを一瞥する。この世界に来た最初の２週間ほどは銃を見るたびに目を輝かせていたものだが、今では見慣れたものだ。
　男の子はカッコいいものが好きなのだ。男の子、という歳でもないが。
　だからコンビニで弾丸が売っていると言われてた時は驚いた。返せよ俺の期待と男のロマン。
「そういうユウカは?　端末と睨めっこしていたみたいだけど」

「これからシャーレに申請をしに行こうとしてまして……最後の見直しを」
「流石、しっかりしてるね」
「先生はそうやってすぐ人を褒めるんですから。仲良くなった女の子みんなに言ってるんじゃないですか？」
「褒めるべきところは褒める、叱るべきところはしっかり叱る。当然のことじゃない？」
「私、叱られたことないですけど」
「……はっはっは」
「誤魔化さないでください！」
　軽い茶番は生徒と話している中で身につけた会話術でもある。困ったことに、これで会話が弾む。女子高生の会話はテンポが良すぎてついていけない。
　世代差、というよりは単純に距離感の問題だ。大人になれば皆ある程度距離が離れてしまう。大人になるというのはそういうことだ。それをこの子たちに押し付けるのは違う。
　この子たちにはこの子たちの青春があるのだから。
「そういえば、先生の居場所を発見するレーダーがエンジニア部の方で開発されました」
「なんでそんな指向性のあるものを」
「分かりませんけど……先生って人気がありますから、一定の需要はあるかと」

「ふむ……没収。当人に確認取れてないのにやるのは先生として止めないとね」
本音を言うと面倒だ。アポなしで来るのは構わないが、騒がしいのは好きじゃないし、なによりも常識が疑われる。
それから適度に話して、申請があるのに引き留めるのも申し訳ないということで解散。少し名残惜しそうにしていたが……。仕事があるなら優先するべきだと背中を押して、別れを告げる。
このまま帰るのも味気なく感じて、コンビニでタバコを買う。カートンで買うのは誰かの目に付くことを考えてこれまでやってこなかったが、何度も通う方が目に付くだろうか。
そう思いながら買うだけ買って外に出ると同時に袖を引っ張られて右を向くと、いつもの顔が見える。
「あれ？　先生、外に居るの珍しいね～」
「……うん、考え事をしてたんだ」
「へぇ～、ならおじさんと考えようよ。いつも助けてもらってるし」
「いや、解決したから大丈夫だよ」
まさかお前のことで悩んでいる、なんて遠回しにすら言えるわけもなく。そう返すと、少しだけ表情が変わる。一緒に居ないと分からないような微妙な変化だが、こころ

なしか面白くなさそうな顔をしているような……？
「先生」
「どうしたの？」
「いつもの喋り方はどうしたのかな～……？」
「いつも、この話し方だよ」
外に居るのにいつもの喋り方するわけないだろうが、と言いそうになるのをグッと堪える。タカナシ相手だとどうにも気が緩んで仕方ない。
先ほどユウカと話しているときとは違う、実家に帰ってきたような安心感がする。
「そっか～」
目が怖い。力とか色々そっちの方が強いんだから凄まれると少し驚いてしまう。
さて、相手の機嫌をどう直そうか。タカナシは普段怒らない分、怒ったときに手が付けられない。静かに怒るタイプが一番難しい。こいつの機嫌を直す方法……まぁ、ちょうどいいか。
「ホシノ、これから時間あるかい？」
「んぇ？」

「はぁ～楽しかったぁ」
「それはよかった」
　来たのは水族館。単純に他に思いつかなかったのもあるが、これが一番のような気がする。魚を通してコミュニケーション、ありがとう魚くんさん。
　タカナシは水族館に居る間、ずっと早口で話していた。どうやらタカナシは魚を見ると饒舌になるらしい。特にクジラへの熱いラブメッセージはすごかった。正直かなり驚いている。お前そんなに早く話せたのか。
　まさかクジラの前だけで半刻潰すとは思わなかった。
「ペンギンってあんなにきれいに丸呑みするんだって知らなかった」
「手食べられそうになってて危なかったけどね」
　ペンギンの餌やりをしていたときに緩慢な動作で魚を差し出したせいで食べられかけていた。慌てて腕を引いたからよかったものの、ぱっくりいかれていた可能性がある。いや、咀嚼しないんだけども。
　残念ながらクジラへの餌付けはなかった。全部吸い込んでしまうからペンギンほどアクティビティにもならないのだろう。
「水族館の売店っていいよね。魚のグッズがたくさん！」
「魚を鑑賞する場所だからね」

「……シャーレの先生じゃなくて先生と来られたら、もっと良かったけど」
「それは言いっこなし。君生徒、私先生」
それだけは越えていけないラインだ。このスーツと腕章を着用している以上はシャーレの先生で、普段のだらけたセンセイではないのだから。
「残念だなぁ～……？」
「お詫び、ってわけじゃないけど」
そうして手渡したのは、一番気に入っていたクジラのぬいぐるみ。
何度か触っていたが、値札を見てそっと置いたのは見ていたから分かる。そのあとちょっと名残惜しそうにしていたのも。
大人はこういうとき便利だ。大人の財布でもちょっと痛かったが。
「……っ。これ、どうしたの～？」
「クジラが君によく似ているから」
「私に？」
買ってから思ったが、ちょっと大きすぎる。半分くらい身体が隠れてタカナシの表情が伺えない。喜んでいるのかもしれないし、呆られているかもしれない。ただ、プレゼントなんて渡す側の自分勝手な感情で渡されるものだから。
だから否定されても悲しくなんてないのだと。そう思っていたのに。

「……ありがと」

おずおずとぬいぐるみから顔を出してはにかむタカナシの表情が、そんな考えを否定する。自分は喜んでいるのだと、教えてくれる。

なぜか涙腺が刺激されて、目を瞑る。涙を、言葉を決して零さぬように。

やはり他の生徒とタカナシはどこか違うんだなと思いながら、なんだか最近こんなことばっかりだなと、冷静な部分でそう思った。

やさしさ

アリス、というクジラが存在する。世間的には「５２ｈｚのクジラ」の方が通りがいいかもしれない。

世界一孤独だと言われるそのクジラは、他のクジラたちの可聴領域にない声を発する。他のクジラたちと泣き声を比較した際に出るヘルツ数でいえばおおよそ２倍ほど高い。

ようは、他のクジラたちとコミュニケーションが取れない。常に独りで居ることから、聾唖――聴覚に異常があるのではないかとすら邪推されていた。

それは、孤独な人間に似ているのではないだろうか。

心の声は聞こえるように出来ていないから。

言葉で発すれば婉曲されてしまうから。

だから心で思っていても、誰にも聞こえない。

しかし。クジラは最終的に一匹だけ、たった一匹だけ仲間を見つけたようだ。タカナシはクジラによく似ている。彼女にも心を預けられる誰かが見つかればいいなと、心からそう思う。

タカナシと二人の執務室は、とにかく静かだ。ただ、沈黙が続く気まずさはない。それどころか、その静かさが居心地よいとすら感じる。他の生徒は良くも悪くも騒がしい子が多い。

だから、こうやって静かに話せる時間は貴重だ。

ただ、毎日居るのはおかしな話だと思う。

「お前、入り浸りすぎじゃね？」

「だってこのソファの寝心地、すっごくいいんだよ～？」

タバコを吸いながら苦い顔をする。あれからタカナシは長い時間入り浸るようになった。学校は大丈夫なのか、アビドスの子たちと居た方がいいのではないかと聞いても大丈夫の一点張り。

本人がいいのなら構わないが、青春というのは大切なものだ。適切な時期に、適切なことをやっていれば後悔も少ない。だから学生時代に後悔がある人間が多いのだ。

かくいう俺もその一人で、生徒と接している毎日が眩しい。彼女らは足掻いている最中だ。だからこそ、後悔してほしくないと心から願っている。

「なのにさ、なんで毛布とかないのさ～……」

「はぁ、毛布……」
「そう、毛布。せっかく気持ちよくお昼寝出来るなら、もっと気持ちよく寝たいじゃん？」
　確かに、一理ある。好きなことをするときはよりのめり込むために環境から入る人間は少なくない。俺も元々置いてあったキーボードなんかを入れ替えて仕事をしている。
「いや、それは分かるんだが、タカナシの家じゃないからな？」
　最近ほとんどの時間をタカナシと過ごしているのは事実だが、それとこれとは話が別。
「そうだけどさぁ……せっかくなら置いてよ」
「俺が寝るからダメ」
「寝ちゃえばいいじゃん」
「お前……シャーレの先生として振舞えなくなるのは問題なんだぞ……」
　学生ならともかく、職場で寝るのはまずい。能率が低下してて寝た方が効率化出来る場合もあるから一概には言えないが、世間的にはいい目で見られない。
「それに、お前以外の前で寝るわけないだろ」
「え……」
　なにされるか分からんし。油性ペンで落書きされたり、場合によっては起きたら知ら

ないところでした……なんてありえる話だ。
　そもそも、この前の体調不良だって自己管理の甘さで見せてしまっただけだ。この前のお礼、という意味では買いに行くのはアリなのかもしれない。
「なぁ、タカナシ。」
「……」
「タカナシ……？」
　驚いたようにいつもより目を開いているのを見て首を傾げる。そんなに驚くようなことがあっただろうか。
　肩を何度か叩くと、次第に目の焦点がこちらにあう。その瞳に見えるのは、マイナスの感情には見えないが、普段見える色ではないのだけは、なんとなく分かる。
「毛布、買いに行くぞ」
「え？　だって、寝るからダメだって……」
「お前用になら、買ってもいい」
　どうせ目の前で寝られるのなら、俺も寝たくなるくらい気持ちよく寝てもらいたい。
「先生って、たまーに優しくなるよね」
「嫌か？」
「……ううん。おじさんはその……好きかな」

「そうかい」
恥ずかしそうに朱に染めるタカナシになんとも言えなくなって、照れ隠しにタバコに手を伸ばす。
ああ……俺にはこの時間が、少しばかり優しすぎる。
「シャワー浴びてくるわ」
「え……？」

寝具周りの専門店があるショッピングモールに足を運ぶと、平日の放課後という後押しがあるからだろう。膝よりも高いスカートを見てもなにも思わなくなったのは感性が死んできたのか、それとも慣れてしまったのか。
前は銃と同様に驚いていたような記憶があるのだが、胸を出していたり、ありえない角度のハイレグを見ているうちになにも思わなくなった。むしろスカートであるだけ健全だと思える。
「タカナシ、離れるなよ」
「もう、おじさんのこと子供扱いしないでよ」
目を輝かせるタカナシを見ていると、歳相応の少女に思えて笑みが浮かぶ。普段の表情とは大違いだ。

お前はそのままで居てくれよ。小声で言ったその言葉をなかったことにしてから、タカナシの手を握る。
「ほら、行くぞ」
「子供じゃないって言ってるのに……」
そう言いながらついて来てくれることに微笑むと、視線を逸らされる。はて、なにかあっただろうか。
「普段と違うから、落ち着かないなぁ～……」
「流石にシャーレの先生として出るわけにはいかねぇからな」
自分の恰好を鏡越しに確認する。ダークグレーのチェスターコートに白のニット、黒のスキニーと出来る限り先生と思われないコーディネート。メガネを外して、髪をアイロンとワックスを使って上手いこと流してハーフサイドアップに。メガネを外したことで優しそうな雰囲気は鳴りを潜めてしまった。
これは人に寄られないかもしれないな、と苦笑してしまう。
「悪くないと思うんだが……」
「……」
「タカナシ?」
「あっ、うん。かっこ、いいんじゃないかな～……」

流されているような感じもするが、視線を合わされないあたり思うところはあるのかもしれない。この世界には人の男性も多くないからな。物珍しさも理由の一つだろう。
「おや、お客様……」
「先日以来。この子用の毛布が欲しくてね。もし悩んだらお願い出来るかな？」
「ええ、もちろんでございます」
言外に邪魔をするなと釘を刺して店員を離れさせる。店員も売るため、役に立つために動いてくれるのは助かるのだが、おすすめされたら流される人間は居るのだ。
決して口には出来ないが、選んでいる時間を大切にしたい。
「適当に見て回るか。気になるのがあれば確かめてみろ」
「え、おじさんが選んでいいの？」
「いや、ホシノ用の毛布だって言っただろ」
「他の生徒も使う用のやつを買うのかな～って思ってたんだけど」
その手もあったな、と苦笑する。他の生徒が来た時に体調を崩さないとも限らないのだから、備えあれば憂いなし。用意しておくべきなのは間違いない。
「いや、俺の前で寝るのホシノだけだって」
「うへへ……そうかな」
「別に褒めてはないんだよな……？」

許しているのに言うのもなんだが、仕事をしている人間の前で寝るのはいかがなものか。
「あ、これ気持ちよさそうかも～」
「あー……」
キヴォトス内ではお世辞にも人気があるとはいえず、とはいえ評価されていないわけでもない。知る人ぞ知る名品を製造しているブランドの毛布。
ここに来たとき、寝具周りを買ってくるときに選んだものだった。
毛布を被ったタカナシはいつもよりだらけた表情で、不思議とこちらの肩の力が抜けていく。
「ん～……これ、すっごく気持ちよく寝れそうかも～……」
「ここで寝るなよ……」
「先生も寝てみれば分かるって」
「いやここ店頭……」
「ほらほら～」
「いやま……力強っ!?」
必死に振り解こうと力を込めても、どういうわけか負けそうになる。その細い身体にどれほどの力があるんだ……。

「そんなに気に入ったのか」
「うん」
「じゃあ、それを使うためにシャーレに来れるな」
「え？」
　呆けたように固まるタカナシに苦笑する。
「いやなに、シロコたちが最近シャーレに来るための言い訳が苦しい……みたいなことを言ってたからな」
　自分のものを置いていて、それを使うためにその場所に行くことはおかしなことじゃない。
「会計してくる」
「え……あ……」
　固まり続けるタカナシに見ないフリをしつつ、会計に行く。
　まるで定期的に来てほしい、とこちらから言ってしまったような気もするが、きっと気のせいだろう。そういうことにしておく。

ぬくもり

私にとって――小鳥遊ホシノにとって、先生ってなんだろう。

普段他の子たちの前でシャーレの先生として振舞っている様子は、完璧すぎると思う。求められた理想像というか、そこに自分自身は居ないような気がする。初めて会ったときに警戒していたのは、きっとそのせい。

一番警戒していた人間が、一番に堕ちるのなんて分かってるのにね。

シャーレに行くときは必ず連絡するようにと言われたアカウントに連絡しても返信がない。そのことに首を傾げながらシャーレの先生の部屋に行くと、心地よさそうにソファで寝転んでいた。

「も～……おじさんがどれだけ心配してたと思ってんのさ～……」

安心して溜息が出る。先生の顔を見るために近付いていくと、毛布もかけないで寝てた。なんで毛布もかけないで寝ているんだろって考えて、目元のクマを見てそれが疲労のせいだってすぐ気が付く。

執務用の机の上を見てみると、左側に山積みになった書類たち。先生は終わった書類を利き手側に置くから、終わった仕事だと思う。

私たちの相手をしながら、これだけの仕事を片付ける先生はきっとすごい。
先生は自分のことをシャーレの先生として振舞わないとダメな人間、なんて言うけど。先生は優しすぎる。そうじゃないと、いくら演じてるって言われても、優しいわけない。
「先生、ありがとうね……」
前も言った気がするけど、何度言っても言い足りない。私はきっと、この人が居なければまた大人に騙されてここに居なかった。
毛布を取りに執務室の端に足を伸ばす。買ってもらってから何度も借りている毛布を持ち上げると、先生のものなのに先生の匂いがしない。
私が使ってるの以外に出されてるのを見たことが本当にないから、私のために買ってくれたのは本当なんだろうけど……。
これじゃ先生、寝られないかな……とぼんやり考えながら先生に毛布を持っていくと頭の中で一緒に寝れば安心出来る、って恥ずかしい発想が出てくる。
「い……いやいや……おじさんが一緒に寝ても、先生は嬉しくないでしょ……」
顔が一気に熱くなったのを感じながら、先生と毛布の間で視線が右往左往。
それでも身体は先生の方に向かっていくのはなんでだろう。
「ほらこう、試しに……」

誰にでもない言い訳を呟きながら、先生の上に寝転がる。うん……硬くて寝心地はそんなに良くないけど、あったかい。

「……うぅん」

「……!?」

呻き声……じゃなくて、単純に寝苦しいみたいだ。やっぱりダメかな。胸の奥が少し痛むのを無視しながら離れようとして――先生に抱きしめられる。

いきなりのことに戸惑って抵抗も出来ずに毛布が床に落ちちゃった。

「ふぁ……せっ、先生……?」

「ん、んー……?」

まるで抱き枕みたいに抱きしめられて、水族館で見たイルカみたいに飛んだり跳ねたりして、忙しく動き回ってる。こんなに大きかったんだ……。

先生の顔を見てみると、さっきよりも優しい顔をしてる気がする。

気のせいかもしれないけど、まるで宝物みたいに抱きしめられてる。先生から抱きしめられる経験をした子は、きっと居ないんじゃないかな。シャーレの先生じゃなくて、不器用な優しさを持ってるこの人に。

そう思うとなんでだろ。

「嬉しい、かも～……?」

なんでこんなに嬉しく感じちゃうんだろう。本当だったら怒るべきなのに、先生にならいいと思ってる。

「……あったかい」

静かに息を吸ってみる。タバコに混じって先生の匂いがする。先生の匂いは嫌いじゃない。タバコのニオイはそんなに好きじゃないけど――先生の傍に居ると、安心出来る。

だからタバコのニオイが気になるってウソを吐いて、タバコを吸ってる先生の近くに居ることが多い。

最初は小言を言ってきたけど、いつの間にか言わなくなってた。叱ってくれるのも嫌じゃなかったけど、受け入れてくれたみたいで胸のあたりが温かくなる。

淡く揺れてるこの気持ちはなんだろう。

「ん……眠くなってきた……」

落ち着いたら眠くなってきた。

抱きつかれたまま、なんとか床から毛布を取って自分たちに被せる。先生にちゃんとかけてあげようとすると、自分の身体がすっぽりと毛布に埋まってしまう。

前に先生が匂いは一番脳みそと繋がっていると言っていたことを思い出す。そこにヒントがあるような気がしながらも、眠気には勝てないで瞼を閉じる。

「おやすみなさい、先生」

この人の隣に、少しでも長く居られればいいなって、心から思う。

「……っ」

目が覚めると月明かりが差し込むシャーレの執務室だった。なんだか気恥ずかしいものを夢で見た気がするが、きっと気のせいだ。

呼吸が普段より浅く、全身が倦怠感に包まれているが、意識して深呼吸すると元に戻っていく。低血圧なのは不便が多いと溜息を吐く。疲れているのかもしれない。

なにせ、風邪を引いてから一か月も経っていない。本来は療養に当てるべき期間すらシャーレの先生として動いていたから。

「寝ちまったか……」

背後の感覚的にソファに寝転がってそのまま落ちたのだろう。天井をぼんやりと眺める。シャーレの天井は見慣れたものだが、執務室で寝るのは初めてのことかもしれない。

不甲斐ない、とはこのことか。誰かに見つかろうものなら説教されるか呆れられるに決まっている。こちらに来てからは誰かに監視されているかのような、生きづらさを覚

える。

「一人の方が気楽、なんて言ったら泣かれちまうんだろうな」

ほとんどの時間を生徒たちと過ごしていて、一人で居る時間というのは少ない。元々はなにをするでもなく、天井や星空を眺めるのが好きだった。

自分のミスや悩みが、画用紙に垂らした絵具のように身体の内から空に染み込んでいくような気がして、そうして綺麗なものを瞳に映すのだ。

昔のことはどうでもいい、今のことを考えなければ……。

「タバコ……タバ……？」

胸ポケットから煙草を取り出そうとして、自分の身体が妙に温かいのに気が付く。ソファに倒れ込んで寝落ちしているのなら、それこそ風邪を引いていてもおかしくない。

それなのに、自室でベットに沈んでいるよりも温かいのはなぜなのか。

「まさか……な……」

胸元に視線を伸ばすと、毛布が上に被さっていた。おそらく誰かがかけてくれたのだろう。問題は、その毛布が盛り上がっていること。

「……」

恐る恐る毛布の裾を持ち、ゆっくりと持ち上げると、見覚えのあるピンクのアホ毛が、猫のように丸まって寝ているのが目に入る。

「すう……すう……」

そっと毛布を戻して、考え込む。今、心地よさそうに寝息を立てていたのは誰だろうか。……いや、現実から目を背けるのはやめよう。タカナシだ。

「なんで……？」

間の抜けた声を出しながらも疑問が尽きない。

応接用のテーブルを挟んだ反対側に視線を投げれば、もう一つソファがあるのだ。片方だけにあるわけがない。普段タカナシが寝ているソファがもしかしたら今寝ている方だったかもしれないが、それにしてもおかしな話だ。人体の上は寝心地がいいわけではないのだから。

信頼の証、といえばそうかもしれないが。自分が美少女という自覚がないのかこいつは。そもそも信頼しているからと言って肌に触れるのを許すな、という古い考えが脳裏を過る。

「おいタカナシ……人の上で寝るな……」

「うへへ……」

「おい……」

何度か揺すって起こそうとしてもよほど深く眠っているのか起きる気配がない。

「うぅん……」

なんか、もう。幸せそうだからいいかぁ……。諦めを含んで天井を仰ぐ。そこまで幸せそうならどうしようもない。

念のため、自分から触れていないからセーフという心の壁を事前に作っておく。

「えへぇ……先生の胸、あったかいなぁ……」

「お前起きてねぇ……？」

そう言いつつも、ぼんやりとタカナシのことを考える。

彼女は雛鳥ではない。多くを経験し、人の嫌な部分を見て、成鳥になりかけている子だ。

その時期が最も不安定で、一番人肌恋しくなる時期だ。子供が成長するのは早いなんて世論で大人の多くは次第に忘れていくだろうが、成長していく本人にとっては息が切れるほど長い道のりだ。

羽を休められる場所であるなら、それでいいじゃないか。こんなどうしようもない大人の中身を受け入れてくれた大事な子だ。

「おやすみ、ホシノ」

きっと、これからの君の人生は多くの困難が待ち受けているんだろうけど……出来る限り、手伝うよ。俺には先生としての責務があるのだから。

せめて今は、良い夢を。

「毛布って一枚だったかなぁ……」
「うん……」
「やっぱりお前起きてるだろ……」
呆れながらも寝たフリをし続けるタカナシに苦笑しながら、自分も瞼を閉じた。
優しい時間は長く続かないものだけれど、今を大切にしない理由にはならないから。

とうばん

「先生、お昼にしよ～よ」

書類に向き合っていると、ふわりと鼻先を桜色が掠めた。鼻孔をくすぐるのは、自分とは違う匂い。片手をデスクの上に置いて、強制的に視線を奪いながらも書類の状態が悪くならないようにペンやインク、紙を器用に避けていることに思わず関心する。

「昼、か」

手元のシッテムの箱とは別の端末をチェックすれば時刻は昼過ぎ。一般にはランチタイムと呼ばれる時間だった。もう昼過ぎになったのかと思う反面、まだこの時間かとガッカリする。

労働時間は短い方がいい。それで仕事量が減るわけでもないが。

「そう、もうご飯の時間だよ。先生もちゃんと食べないとだよ」

「いや、まだいい」

「えっ。もうお昼過ぎなのに?」

「そう、昼過ぎなのに」

「体内時計、ズレるんじゃないかな～」

「シャーレに来てからずっとやってることだからな、今更変える気もない」
俺の昼食時間は少々ズレている。一般のソレとは少しズレている生活を送っていることもあるが、元から昼食は遅い方だった。朝夜は自炊して済ませるが、昼だけは仕事に集中したくてキリのいいところまでやっているからか、いつも昼時を外してしまう。
喫茶店などではランチタイムを外してしまうことは玉に瑕だが……喫茶店にはだいたい学生が居るものだ。逆に、チェーン店や定食屋には社会人が居る。
食は自由で豊かであるべき、そんな信条を胸に生きているため食事中に知り合いと顔を合わせたくない。だから困ったことも特にないのだが。
「……お前まさか」
「な、なに……？」
自分が昼食時だから、さりげなく俺を巻き込もうとしてないかこいつ。疑いの目を向けると、瞳を閉じていつもの溶けそうな笑顔を浮かべる。あの笑顔は……誤魔化すときの笑顔だった気もする。
これだけ長い時間一緒に居ると、細かな表情の変化も分かってくるものなのだろうか。シャーレに来てから、特定の生徒と長期間一緒に居ることがなかったから、それすらも忘れてしまった。
「気が変わった。飯にしよう」

「やった！　おじさん、実は気になってるところがあってさぁ」
「お前それ目当てか!?」
「うへ～、バレちゃった」
　明け透けな態度に苦笑してどうしたものか考えていると、瞳の色の中に不安が混じるのが見えた。
「……えっと、無理そうなら――」
「ダメとも言ってないだろうよ」
　押しが強いと思えばダメそうならすぐに引く。こういう対応に弱いのだろうなと自覚しながら、支度のために鏡を見る。白のズボンに黒のシャツに括り付けられた赤と白のネクタイはカッチリした印象を受けるが、その上から黒いベストを被せれば大人の威厳が感じ取れる。
　髪型は後ろに流しているものの、メガネばかりはどうしようもなく、以前の私服の時とは違って真面目さが前面に出たコーディネート。大人とはこんなものだよな、と溜息混じりに鏡付近にあるコートハンガーから、シャーレの腕章が付けられているものを取って羽織る。
　シワがないことを確認してから、後ろで待ってる彼女に声をかける。
「待たせたな」

「……」
「タカナシ？」
「先生って、そうやってるとカッコいいよね」
「……行こうか、ホシノ」
　返事を待たずに執務室前にあるエレベーターに足を向けると、慌てたように付いてくる足音が後ろにピタリと張り付いて、違うリズムを叩き始める。
　ちょっとした意地悪のつもりだったが、思いのほか効いたらしいことに苦笑する。
「おじさんを急がせないでってばぁ～……」
「お前より俺の方が年上だっての」
　急がせたのはお前だろうに。

　見回りついでに、シャーレ近郊から外に足を運ぶことにした。タカナシもシャーレ近郊以外はあまり歩かないらしく、表情はいつもより明るく見える。
　そうは言っても、D・U付近のため他校の生徒もちらほら見える。シャーレの執務室のような空気感で話せばたちまち明日の話題をさらえるのだろうが、面倒が目に見えているのでパス。

いつも先生として付けている心の仮面を取り出して、自分の中で言葉が上手く変換されていることを確認してから歩き出す。

そうしている間に、見知った顔が見える。向こうもそれに気が付いたようで、声をかけられる。

「先生、こんなところでなにを?」

「ああ、リンちゃん」

「誰がリンちゃんですか」

メガネを光らせながら近付いてくるのは、連邦生徒会長が行方不明になってから代理を任されている七神リン。その光るギミック、目に悪くないのだろうか。

余計なことを考えていることに気が付かれたのか、詰め寄られていい笑顔を向けられる。

「シャーレしか最近見回ってなかったからさ。見回りをね」

「それならそうと、先におっしゃってください」

俺、もしかしてシャーレ付近ですら自由な行動を制限されているのだろうか。先生というよりかは過保護に育てられた温室育ちのお坊ちゃまではないだろうかと思ってしまう。

「資料には目を通されていると思いますが、昨今の情勢的に一人で出歩くのは避けてく

ださい」
「ふむ」
「これまでから、先生がこちらの希望であり、弱点でもあると露呈している状況です」
「ほう」
「連邦生徒会や、ひいては様々な勢力に圧をかける交渉材料にされてしまうでしょう」
交渉材料に使われる、というのは攫われる可能性が高いということだろう。
こんなダメ人間ひっ捕まえてどうこうしようとするなんて、キヴォトスはよほど自由なのだろうか。他人事のように話を聞きながら相槌を打つ。
「……聞いてますか？」
「うん、ちゃんと聞いてるよ。心配してくれてありがとうね、リンちゃん」
「当然です。キヴォトス内で最も大切な人ですから。……あと、誰がリンちゃんですか」
「いや、これがどうにも通りがよくてね」
「はぁ……まあいいです。ところで、そちらのホシノさんは、何故先生と行動を？」
あくまでも眉間にシワが寄らないように話を分析して、どう回答するのが最適か考える。今日の護衛、というだけでは理由として弱いだろう。今後見られた時に言い訳がつきにくい。ふむ……。
「実は、シャーレに当番制を実施しようかと思っててさ」

「当番制、ですか」
「そう、交流出来るし各学園の現状も調査出来るかなと思って」
　いわゆる一石二鳥、というやつ。各勢力の状況を把握出来るのは、連邦生徒会にとってもありがたみのある話だろう。問題は、一個人に依存する都合上諜報活動をするよりも非効率で偏りが出てしまうことだが……。
「そうですか……誰を当番にするかは決めていますか？」
「うーん、そうだね。ツテのある代表クラスの面々にはお願いしたいと思ってるよ」
「なるほど、それでしたら思いもしない情報が出てくるかもしれませんね」
「ただ、昨今のこともあるからしばらくはホシノにお願いするかな」
　これだけは譲れない。執務中に気の許していない他人に入られるのはストレスだ。美少女を侍らせておいてなにを言っているのか、と多方面に喧嘩を売るかもしれないが、顔だけで好感度は稼げないのだ。
　リンの警告の件もあるから、理由付けとしてはちょうどいいだろう。
「そうですか……ホシノさんも、同意されたということですよね？」
「そうだね～後輩ちゃんたちが心配だけれど、先生の方がもっと心配。すぐどこかに行っちゃいそうだもん」
「ふふっ、そうですね……」

上手いこと合わせろとアイコンタクトすることもなく、まるで事前に決められていたかのように回答してリンを笑わせる冗談も混ぜたホシノに舌を巻くと同時に、申し訳なさも感じる。

こういうときにどう言い訳するか、決めておくべきだったかもしれない。

口八丁で上手いこと誤魔化せたのは奇跡に等しい。トップ解決なんてするもんじゃないな、と溜息を吐きそうになるのを抑えて見守る。

「では先生、くれぐれも外出するときは小鳥遊ホシノさんに護衛をお願いするようにしてくださいね」

「うん、分かった」

「では、失礼します。ホシノさん、よろしくお願いしますね」

「もちろん。大船に乗った気持ちでおじさんに任せて～」

少し頭を下げてから離れていくリンの後ろ姿を見送ってから、安堵の溜息を吐く。誤魔化せてよかった。あのまま詳細を決める流れになっていたら、言葉に詰まっていたかもしれない。

「先生、おじさんと一緒の時以外ってあんな感じだったっけ」

「ああ、うん。そうだよ」

大人は本性をひた隠しにするもの。真実なんて誰も望んではいないのだから、望まれ

ている虚像である先生として振舞う。神が人に恵みをもたらしていると信じられているように、ある意味では偶像崇拝とも言える。

そうは言っても、先生としての体裁を保つために巻き込んでしまったのは事実だ。どうしたものか悩みながらタカナシの表情を伺うと、少なくともマイナスの色は見えない。

「……そっか。おじさんの前でだけかぁ」

そう言いながら頬を緩ませるタカナシの表情は、いつもの溶けるくらいの表情ではなく、どこか真剣な雰囲気を感じて息が止まりそうになった。そうしている間にご機嫌な足取りで進むタカナシになんとか息を吸い直して追い付く。

横顔を改めて見直してみると、いつも浮かべているのほほん、とした顔がそこにあった。気のせい、ではなかったと思うが。

「いいことでもあった？」

「え？　ん～。うん、おじさんにとってはいいことがあったかな」

「それは良かったな」

「うん、ありがとね。こんな私のためにあそこまでしてくれて」

真っすぐな言葉を向けられると、どうしても固まってしまう。打てば響く魔法のように、心に響いたこの言葉を、しばらく忘れることはないのだろう。

きっと彼女もそのことを分かっていて、気を取り直すように大きな声を出してくれる。

「じゃあ、先生のオゴリでたくさん食べちゃおうかな」

「そこは忘れてないの……？」

「うへ……もちろんだよ～」

大袈裟に肩をすくめてみせれば、おかしそうに笑われた。

じかん

心地よい時間が流れている。これが毎日続けばいいのに。そう願う反面、本来やるべきことを忘れているような。どうしようもない不安に包まれている。

見上げる空はこんなにも澄み渡っているのに、心の中は雨でも降りそうなぐらいの曇天で。晴れる様子はなければ雨が降る様子もない。ただ、停滞気味な日常を過ごしていることに嫌なストレスを感じている。

対処法のないストレスほど厄介なものはない。日々が消費され、擦り切れるような重圧に人間は耐えられるように出来ていないのだ。表情にこそ出さないが、死に急ぐようにタバコの本数だけが増えていく。

時間は迫っているのに、連綿と続く時間ばかりがタバコの燃え滓のように色褪せていく。

「先生、最近タバコ多くない？」

「ふぅ……そうか？」

「うん、私が居るときはあんまり吸わないのにもう5本目！」

そう言って5本指を立てながら普段よりも難しい顔をしているタカナシが不機嫌に

思えるのは、気のせいではないんだろう。その証拠に、ちょっと睨まれている。
自覚はある。ただ、俺にもどうしようもないことだから話すわけにもいかない。どうにか理屈を捏ね繰り回すために、彼女から話を引き出すことにする。
「……あー、アビドスの子たちに何か言われた？」
「そう、おじさんの服から別の匂いがするって言われてさ。おじさんとしてはちょ～っと見過ごせないかなって」
「ほー……」
タカナシの服から別のニオイ、といっても心当たりは特にない。タバコは毎回外に向けて吸っているし、空気清浄機も稼働させている。ニオイ消しのためにアロマなども炊いているし……と、そこまで考えて一つの結論に辿り着いた結論に苦虫を噛み潰したような顔になるのを抑えきれない。
理由は分かった。分かったが……これを本人に言っていいものか悩む。
「……」
「思い当たるフシ、あった？」
「あー……っと。あくまで想像なんだが。タカナシ、シロコあたりからなんか言われてないか？」
「え？　なんでシロコちゃんって分かるの……先生の匂いがするって言われた」

「タバコのニオイじゃなくてか」
「え、うん……どしたの?」
　やっぱりか、思わず渋い顔をしながら天井を眺める。不思議そうに俺のことを見ているタカナシは、おそらく理由に気が付いていない。
　ただ、気のせいかもしれない。
「ちなみにいつ言われた?」
「一週間くらい前かなぁ～。おじさんもびっくりして誤魔化すの大変だったんだから」
「……」
　腕を組んで、瞳を閉じる。一週間くらい前は……ソファの上で寝ていて、タカナシが上に覆いかぶさっていた頃だったと思う。だから、おそらく長時間一緒に居たことによるもので、タバコのニオイではないのだろう。
　言わぬが花という言葉もある。人間は気付きの生き物で、自分の過去の行動に対しては後悔を募らせるものだ。ただ、気が付いていて言わないのも違う。
「もう、先生のせいだからね～。おじさんは怒ってるよ」
「ほ～ん、そういうこと言うのか」
「え、なんでそんなに悪い顔してるの」
　横暴な言いかたに少々、いやかなり腹が立った。

仕方ない、心を鬼にしながらも真実を告げることにする。
「なぁタカナシ、ここまで確認してまだ気が付かないかぁ」
「な、なにに……？」
「多分、この前俺の上で寝てたせいだぞ」
「あ……あれは、先生が抱きしめるからで……」
「試しに乗っかってみました、って白状しておいてよく言う」
あのあと、お互いにいたたまれない気持ちになって、ああなった理由を聞いてみればあっちから乗ってきたと自白した。寝ているときとはいえ、女性を軽率に抱きしめてしまったことは反省しなければならないが、それはそれ。
警戒心がないなんてものじゃない。見ているこっちが不安になってくる。
「もうちょっと警戒しろよ。俺だって男だぞ」
「いや～……だって、他のみんなに手を出さない先生が手を出すとも思えないし」
「出さねぇわアホか」
「へ～……ならさ、誰が一番気になってるの？」
「は？」
気になってる……というのはおそらく一個人として、誰が好ましいか。という話なのだろう。

「セリカちゃんは素直になったときのギャップも可愛いし、アヤネちゃんは奥手だけど真っすぐな子だし、ノノミちゃんはおじさんもドキドキするくらいの母性！　思わず飛びつきたくなるもんね。シロコちゃんは手のかかる子だけど、逆にそこが愛おしいって思う人も居るんじゃないかな～？」

「そうかもな……」

確かに、魅力的な子たちだろう。ただ、あくまで彼女らは生徒でしかない。手を出す対象ではないし、出してもいけない。大人は子供に対して公平でなければならないのだから。

じゃあ、この状況はなんだ？

彼女を招き入れ、あまつさえ他人に見せていない中身を露呈してまで一緒に居るこの状況は、公平であると……特別扱いしていないと、本当に言えるのだろうか。

「……」

「先生？　大丈夫？」

いつものふにゃりとした笑う顔ではなく、心の底から心配しているような表情。申し訳なさを感じながら、必死に感情を抑え込む。

お前がそんな顔をしないでもいいんだ。

「そんな酷い顔してるか？」

「うん、なにかを失ったみたいな……？」
「そうか……」
まだ先生としての体裁を保てていると思っていた。だが……もう既に、崩れてしまっていたのだ。
嫌なことに気が付いてしまった。気付かなければ、この平穏がずっと続いていたのに。
「タカナシ、気にするならあんまり来ない方がいい」
「え……そ、そういうつもりじゃなくておじさんは……」
俺は今、どんな顔をしているんだろう。疲れた顔をしているんだろうか。取り繕えもしないこの表情は、きっと相手に不快感を覚えさせるには十分すぎる。
最後だからと頭を撫でて笑いかける。髪は女の命だからと、望まれない限り避けてきた。自分からするのは、これが最初で最後だ。
俺の先生という名前は教育者であることの証左ではないけれど――公平性を失った時点で、バッドエンドに片足を突っ込んでいる。
「ごめんな、ホシノ。……気付かなけりゃよかったわ」
「な……なにに……？」
深呼吸をして、シャーレの先生としての仮面だけ付ける。これもひび割れてしまって

いるが、今だけは役割を果たしてもらわなければ。
「先生として、公平性を失った時点で俺はもう終わってるんだよ」
「それって、どういう……待って、行かないでよ先生！」
追い縋ろうとするホシノに振り返りたくなる気持ちを無理にでも抑えつけて、シャーレの執務室を出る。急く足をどこに向けようか悩みつつも、入るのは自分の部屋。
備え付けられた電子ロックを誰にも踏み入られないようにプライベートモードに変えて、ドアに背を預ける。
ああ、俺は一体なにをしているんだ。あの時横目に見えたホシノの顔は、瞳は……涙に濡れていた。
こんなことなら、もっと上手くやればよかった。俺がバレた瞬間に、他にやりようはあったのに。……気付かなければ、よかったんだ。
「誰が一番気に入ってるなんて、そんな答え、決まってるのになぁ……」
涙に滲んだ声は誰にも届くことなく雨の降り始めた空に消えていく。雨が地面に吸われていくのに、後悔だけは胸底に沈んだままに。

その次の日から――ホシノがシャーレに訪れることはなかった。

こうかい

８時過ぎの匂いが窓の外から流れてきてる。起きないとって、そう思うのに身体に力が入らない。

あの日、シャーレで先生に拒絶されてからはずっと、ベットから起き上がる気力がなかった。

しばらくしてから外が暗くなってるのに気が付いて、逃げるように家に帰ってきたときはすんなり動く足を恨んだ。先生を追いかけるときは全然動かなかったのに。

「うへぇ～、今日もダメかなぁ……」

毎日行ってた対策委員会の部屋にも行ってないからみんなから心配のメッセージが来てるけど、いつも通りだよって家に来ないようにお願いしてる。

ベットから身体を出して活動することが出来なくなった。

水族館で先生に買ってもらった大きなぬいぐるみを抱きしめて涙がこぼれ落ちないように、必死にこらえる。先生に抱きしめられて眠った日からずっと、このぬいぐるみと一緒に寝てる。これを抱きしめてると、先生に抱きしめてるみたいですごく安心するから。

でも、ぬいぐるみから伝わってくる水っぽさが、涙を押し留めきれていないことを嫌でも自覚させてくる。安心と不安と閉塞感で頭の中がごちゃ混ぜになって胃の中のものが出てきちゃいそう。

あれから何日も経ってるのに、昨日のことみたいに思い出すのはなんでだろう。

「むう……」

頭の上にまだ先生の手の感覚が残ってる。あの人は自分からスキンシップを取らない人だった。だから、あれがきっと最初で最後のスキンシップ。

シャーレの先生としていっぱい触れてたはずなのに、ぎこちなく撫でられて髪がボサボサになってたのに帰ってから気付いた。

なんで、嫌なことほど忘れられないのかな。あの日のことを全部なかったことにして、それならきっと、あの日を続きをやり直せるはずなのに。

「忘れられないのかなぁ……」

これをずっと抱えて歩くのはきっと苦しい。それでも、大切な記憶なんだって置き忘れたまんまなんだろうって、思う。

手のひらを重ねて、片腕がもし先生だったらって想像しちゃう。きっと、涙なんて吹っ飛んで、すぐに笑顔になれる。

実際には私の手は先生に届かなかったのに。想像では自分にとって都合のいいこと

ばっかり。

「笑っちゃうよね～……ほんとに」

先生はずーーっと、「シャーレの先生としてじゃない自分のことをロクな人間じゃない」なんて言っててたよね。

でも知ってる？　先生。

私は、そんな先生の方が好きだったんだよ。シャーレの完璧で、心をひた隠しにしてる先生なんかより、ず～っと。

「なーんで、全部終わったあとで気がついちゃうかなぁ……」

笑ってるはずなのに、声に力が入らない。次に先生に会うまでに上手く笑えるようにしておかなくちゃ。

私がワガママを言って困らせたから、勝手なことをしたからきっと拒絶したんだ。あの顔は、無くしたんじゃなくて失望した顔だったんだ……。

「うう……」

そこまで想像して、ダメだ。胸の奥がズキリと痛んで仕方ない。

銃弾を受けても、こんなに痛くなかったはずなのに、どうしてこんなに痛いんだろう。

「あ、あはは……おじさん、こんなに弱かったかなぁ……」

淡く揺れてるこの気持ちの名前はもう分かっていたのに。きっと、私に勇気がないか

ら。ならきっと、この感情を抱くこと。それこそが間違いだったんだ。
孤独が息をするたびに胸の奥に突き刺さるとしても、それが正しいと決めつけるように。あの日の光景と後悔を瞳の裏に焼き付けて言い聞かせる。
でも……。
「一緒に色んなことを知っていける時間もあったのかもしれないなぁ」
ねぇ、先生。私ね、やっと気付けたんだよ。先生と一緒に居るとね、アビドスのみんなと一緒に居るときとは違う、胸がぽかぽかあったかくなってやさしくなれるんだって。
先生の傍に居ると、胸のあたりがぎゅ～っと苦しくなるけど、それが全然嫌なものじゃなかったんだって。
この人の隣にならきっと、ずっと居ても嫌な気持ちにならないで。きっと、ずっと一緒に居たいって思うようになるんだろうなぁって。
あの日の先に、なにがあったのか分からないけど。一緒に歩んでいける未来があったのかもしれないけど、一歩いっぽ、後ずさりして諦めるから。だから、だからさ……。
「捨てないでよぉ……先生……」
捨てられる。その言葉を思い浮かべるだけで、身体が震えて抑えていた涙が栓を切ったように一気に流れ始める。せめて泣くなら、好きな人の胸の中で泣きたかった。

「ああ、そっか。好き、だったんだぁ……」
先生、私ね。先生の匂い、すっごく好きだったんだ。タバコ臭くて、でもどこか安心させるあの匂いが。
そりゃ、酷い大人だなぁ……とか。
ああ、私が居ないとこの人ダメになっちゃいそうだなぁ……とか。
思うところはいっぱいあったよ。
「それでも、先生の優しい顔が、大好きだったんだよ」
なのにさ。そうやって、一方的に別れを告げて……そうやって、自分の心を黙らせるなんてズルいよ。私はこの気持ちに気付いたばっかりで、どうやって向き合ったらいいのかすら分かってないのに。
「もう……どうせ突き放すなら、惚れさせないでよぉ……」
でも、その好きな人は隣には居なくて。頑張って笑おうとしてもいつもの笑いが出てこない。
「私……先生を独り占め出来るあの時間が、大好きだったんだから……！」
置いていかれるのはもう嫌だ。ずっとそれだけ願ってて、それが叶わないって心のどこかで諦めちゃってる。それでも行動だけはしてて、中途半端な結果だけが生まれてる。

恨めたらきっと、楽になれる。でも、それをするのは忘れることより、もっとずっと難しいことだから出来ない。

あの時間は、大切なものなんだから。

「ユメ先輩……私、どうしたらよかったのかな」

もう居なくなった先輩ならもっと上手くやれたのかな。ずっと笑って楽しそうに語り掛けてきた先輩なら。このどうしようもないように思えるバッドエンドすら乗り越えて、ハッピーエンドに導いてくれたのかな。

光の螺旋は遥か遠く、あの空のように遠いんだろうね。

枕元にある手紙を見上げて、少しの間瞳を瞑る。起きた時にはなにもかも元通りになってたらいいのにって、心から願いながら。

夜になったとき、私は居ても立ってもいられず、外に出た。ふらふらとした足取りで、どこに行くのか、どこに行きたいのか……分からないまま。

かんぺきさ

ある日の昼下がりのシャーレ近郊にあるD・U・地区。気が付けばここに向けて足が伸びていた。なぜ、気分転換の手段に事欠かないショッピングモールなどではなく、ここだったのだろう。

街並みを眺めながら歩き続ける。どこに向かうでもなく、ただただ歩く。

あれから数日、ホシノは一度もシャーレに来ていない。一方的に謝られ、否定され、突き放された。もし俺があんなことをやられていたら、しばらくは立ち直れないだろう。

ただ、これが俺の望んだことだ。タバコをよく吸うダメ人間ではなく、シャーレの先生こそこの世界には必要なのだから。

ハッピーエンドは俺ではなく、彼にしか作れないのだから。

「……はぁ」

思わず漏れた溜息は、いったいなにを嘆いているのだろうか。

普段はこまめに返しているモモトークのメッセージもなんだか億劫で放置している。

自分のものも、先生としてのものも含めて。

「ああ、そっか」

ゴールの見えない道を歩き続けるのは苦痛だ。それでもシャーレの先生は耐えなければならない。ただ、それで中身が別かどうかは話が異なる。

俺は……心のどこかで耐えきれなかったのだろう。それで、外に救いを求めた。本来救うべきである生徒に対して、救いを求めてしまったのだ。あれからずっと、独り言でさえ自分を出せていない。

それでも決めた道なのだから、なんとか歩まなければならない。足を止めることなく歩き続けていると、不意に腕を掴まれる。

振り返ってみると、息も絶え絶えのリンがこちらを睨み付けながら溜息を吐いていた。

「探しましたよ、先生」

「……とりあえず、座ってはいかがでしょうか」

「ああ、うん」

強制的に引っ張られ辿り着いたのは、シャーレの会議室。あの日からずっとこの部屋で過ごしていたからだろう。すごく散らかっているなと他人事のように思う。

それに苦言を呈するわけでもなく、座れとだけ言われてふらつく身体を椅子に腰掛け

る。

「とりあえず、顔が見れて良かったです。ずっと連絡が取れませんでしたから」

「ああ、ごめんね……」

「ええ、モモトークでも一切連絡が付かないし、外に出ている様子もない。シャーレはプライベートモードに設定されて私でも入ることが出来ず、戻っていた途中で先生を見つけました」

今の自分を見られてはならないと、私物のタブレット端末に登録してある連絡先以外を全てブロックする緊急用のプロトコルを起動していたことを言われて思い出す。

つまり、自分とホシノしかこのシャーレに入ることが出来なかったわけで。それは心配もされるし、探されもする。聞いたところによると、大事にされている様子もないのだから感謝すらしている。

自分を拒絶した方が勝手に落ち込んでいるなら普通なら無神経だと詰られるところだが、ホシノはきっと違うだろうから。

「ご無事なようで、本当によかった。勝手にいなくなられては、困ります」

「……うん」

気落ちしたトーンと微かに震える唇から、連邦生徒会長のことを思い出しているのだと気付いても意図的に無視をする。

お互いのためにも、触れない方がいいだろう。
「それで？　それだけ必死に探してくれたんだったら生存確認以外にもなにかありそうだね」
「そういうわけでは……いえ。それでは、単刀直入に」
「うん、いいよ」
「先生、どうしたんですか」
「……うん？」
はて、心配されるようなことがあっただろうかと首も傾げる。確かに、仕事の能率は悪いし、しばらくシャーレから出てもいない。食事が喉を通らない……ことはないが、少なくなって、これまでしていた自炊もここ数日はやめてしまっていた。
執務室に行くのかどうにも億劫に感じて、いつもの部屋で仕事せず、出来る限りこの会議室で作業している。それでも書類は執務室にあるせいで何度も足を踏み入れて元々はなかった数々の品に見ないフリをしていることには気付かれていないはずなのだ。
とんと思い当たるフシがない俺に信じられないものを見るかのようにしてから、リンは目を伏せる。
「先生、鏡をちゃんと見られた方がよろしいかと」

「鏡……？」

会議室に備え付けられたクローゼットの姿見の前に立って、そこに映った自分の姿に驚愕する。

整えられた髪はボサボサになり、目の下には化粧でも誤魔化せないだろう隈。健康に見える作られた血色の良さは腐った果実のようにその色を無くしている。これは一体、誰なのだろう。

先生としての体裁を保とうとして、全くと言っていいほど保てていない。なんだそれは。お前は自分の身勝手で、一人の女の子を傷付けたんだぞ。出そうになる溜息をすんでのところで飲み込んで、誤魔化すように苦笑する。

「ああ、うん。なんだ……最近寝つきが悪くてね」

「当番をお願いしたはずの小鳥遊ホシノさんが居ないことと、なにか関係が？」

「――悩みを聞くときは、もうちょっと自然な聞き方があるような気もするけど」

「回りくどい聞き方をすると、煙に巻かれそうな気がしましたから」

図星を指されたことに驚きながらも、焦りを表情に出さないように冗談を飛ばしても、代行としての眼光が逃がしてくれない。

ここに居るのは優しいリンちゃんではなく、連邦生徒会長代行……七神リンなのだと痛感させられる。ゲマトリアの黒服と相まみえたときでもここまでではなかった。

つくづく先生としての体裁とは便利な隠れ蓑だったのだと自覚しながらどうにか誤魔化そうとして――すでに詰んでいることに手を挙げて降参の態度を取る。
「なんで気が付いたのかな」
「先生がこれまでに何日も外に出ないことはなかったはずです」
「そうだったっけ」
「……ええ。それで、最近当番について話したのを思い出しまして」
ピクリ、と眉間を動かしながらも最後まで説明し切るリンに心の中で賞賛する。連邦生徒会長と比べられがちだが、彼女も立派な人間だろう。
ピシッと伸ばした背筋を背もたれに全て預けると、無機質な冷たさが背中越しに心地良い。
「なぁ、リンちゃん。シャーレの先生は、平等でなければならないんだよ」
「はい？」
「全ての生徒に優しく、全ての生徒に手を差し伸べ、全ての生徒をハッピーエンドに導く。そんな姿が理想だったんだ」
「……」
それは、少年時代に恋焦がれる御伽噺（フェアリーテイル）の英雄（ヒーロー）。悪を下し、正義を貫き、幸せを与える。それでいて自分の痛みに無頓着で、他人の為なら拳を振るう。

そんなヒーローになるのだと、キヴォトスに来た時に決めたのだ。
「それなのに……個人的な感情を一人の生徒に持ってしまった。これは、許されないことだろう」
それなのに、自分で作った仮面に振り回されている様子は酷く滑稽で。理想とは程遠く、目指したハッピーエンドには縁遠い。
ダメな人間だな、と苦笑していると、不意にリンが優しく微笑んだ。
「それが、小鳥遊ホシノさんだと？」
「……」
「無言は肯定、ということでよろしいですか？」
「お好きに」
もはやこれまで。シャーレの先生としての体裁を保てず、あとは崩壊を待つだけの状況に肝すら冷えないことに驚く。ああ、なんだ。俺はずっと楽になりたかったのかと。
救いたいと口で言いながらも、それは理想郷の存在を証明するかのように難しいことだったのだ。
「いえ、先生。先生はずっとそうでしたよ」
「は……？」
ずっとそうだった、俺が？　平等ではなかったのだと？

思考がぐるぐると廻り続ける。いや……どの生徒にも困っていれば手を差し伸べたはずだ。全てはハッピーエンドのために、最後に笑って終わるために。

「ええ、大なり小なり誰かを気に入って。気に入ってなくても、自分なりに折り合いを付けて救う。それが生徒だから」

「だからそれが私なりの平等で……」

「先生。私は平等を人が定義出来るものではないと考えています。そして、人が出来るものではないとも」

遠回しにそれが出来る人間は作られた理想像であると断言していることに、シャーレの先生は作られた虚像であると言っていることに、彼女は気付いているのだろうか。

「この前、D．U．の近くで会ったときに自分がどんな表情をしていたか……先生は気付いていましたか?」

「いいや」

「あの時の先生は、普段よりもずっといい顔で笑ってたんですよ。心の底から安らぎを感じているかのような」

「表情を変えているつもりはなかったけれど」

「自覚がないからこそ、心から思っているのでしょう」

そうなのだろうか。そういう安らぎは、心から想い、相手に伝えてこそ成り立つもの

ではないのだろうか。そう思いながらも、どこか納得感のようなものも感じる。
「私が言えるのは、ここまででしょうか。彼女なら、もっと気の利いたことを言えた気がしますね」
「……そうかな。そう、かもね」
顔も思い出せない湖で笑っている少女に心の中で謝罪する。君と逢うのは、もう少し先になりそうだ。
時計の歯車のように廻って、やがてかちりと音を立てた気がした。

えがおのうら

夜の満点に煌めく星々が驚くほど綺麗で、あの星たちは自分とは違うんだなって思って笑ってしまう。あの子たちは笑ってるのかな。

私は、今笑えないのにさ。

ぼんやりとした頭で辿り着いたのはアビドスの屋上。砂漠化の影響でざらざらとしていて、他の学校なら頑張って掃除しているものはなにもない。

転落防止柵すらも取れてしまった端の部分を椅子にするようにして座り込んで足元を見ると、思ったよりも高くなくて笑っちゃった。痛い思いくらいなら、出来るかなぁ。

「よいしょっと」

アビドスはこのまま消えていっちゃうんじゃないかなって、何度も思った。諦めそうになる自分をそれでもと言い聞かせるように自分の出来る限り、先輩の守ってきたものを守ろうとしてきた。

いつの間にか後輩たちも増えて、でも私にとってあの子たちは一緒に背負ってくれる人じゃなかった。だって、私は先輩だから。ユメ先輩がそうしたように、辛いこと、苦しいこと……その全部を笑顔の裏に全てを封じ込めるようにして、一人で背負わなく

ちゃいけないんだ。

でも、先輩がそうだったように……ううん。先輩の真似事をしてる私の方がずっと酷い結末だった。みんなに迷惑をかけたくなくて全部背負い込んだ結果、大人に騙された。

「あの時は……」

そう、騙されたことの怒り、みんなに対する申し訳なさ。そして……私の終わりはここなんだっていう諦めばっかり閉じた瞼に焼き付いてた。

でも、そうはならなくて。シャーレの先生に助けてもらった。なにを考えてるか分からなくて、底抜けに優しかったからこそ、信じられなかった人に。

信じなかった私に、あの人は優しい笑顔のままこう言った。

『子供は大人を疑うのが仕事で、君ら子供を信じるのが私たち大人の仕事だからね。ただ、あの子たちを悲しませるのは感心しないよ』

ああ、なにそれ。信じるのが仕事だなんて、本気で言ってるの？

出そうになった言葉は引っ込んで、代わりに出てきそうになる嗚咽を必死に抑え込んだ。そうやって、私にとっても頼れる大人って認識に変わったんだ。

でも、その時は身近な大人ってだけで好きな人なんかじゃなかった。ほんとだよ？

「好きになっちゃったのって、いつだったかなぁ」

空に浮かぶ星たちに聞いてもなにも応えてくれないのなんて分かってるけど、それでも聞いてみる。

私にとって、初めてこの人も人間なんだって思えたのは、先生を驚かせようとシャーレに行ったとき。心底リラックスしてたはずの表情を残しながらも、口だけで驚いている先生に笑わないようにするのが大変だったなぁ～。

シャーレの先生は絶対に浮かべないあの表情と、普段は全くしないタバコのニオイはあの人はみんなが思ってるような特別な人なんかじゃないって分からせるには十分だった。

完璧な先生になんて、興味ないんだもん。

だから、きっかけはきっとその時。でも、落ちてしまったのは……布団を買ってくれるって言ったとき。

「私は、冗談のつもりだったんだけどな～」

あの時の先生の顔は今でもちゃんと思い出せる。真面目な顔して考えて、疲れたように溜息を吐いて……最後に優しい笑顔を見せられた。たったそれだけのはずなのに、私はちゃんとここに居ていいんだって言われたみたいに思えて、胸の奥が温かくなった。

それからずっと、執務室に居座ってもなにも言われなかった。それが、なによりも嬉しかった。

「だからこそ、だよね」

……うん、最後に先生に会って、忘れるってちゃんと伝えよう。元通りの関係に戻るって、言いたくないけど、言おう。それがきっと、一番幸せだって、家を出る前に決めたんだから。

でも、あの毛布だけは欲しいな。あの毛布さえあれば、先生が隣に居ない寒さにも耐えられる気がするから。

そうだよ。アビドスに来たのは、覚悟を決めるため。絶対に、寂しさを誤魔化すためなんかじゃないんだから。

どんな結末になっても、後悔だけはしないようにしよう。これまで通りの関係じゃなくなってもお互いに、生きてるんだから。

ぼんやりとした頭で辿り着いたのはシャーレのエントランス。ここで、なにかが終わるはず。

電気すら付いてないのを見る限り、先生は今仕事中かな。すごいなぁ、私はずっと止まってたのに、あの人は動き続けてる。

「あ……プライベートモード……」

通行用の端末が真っ赤になってるのを見て、前に教えてもらったことを思い出す。仕事で忙しかったり外出している時は誰も入れないようにしてるって。なら、入れないかなぁ……。

諦めようとする足取りを一縷の望みをかけて端末にカードをタッチしてみると、さっきまで真っ赤だった端末が青に変わって、同時に明るくなる。

「あ、空いちゃった……」

これ、入っていい……ってことかな。まだ、先生に会えるってことなのかなぁ。

先生は、プライベートモード中に入れる人は数人だけだって言ってた。その数人のうちに、私は入れていたんだって思うと泣きそうになる。

「これじゃ、いけない……よね……」

零れ落ちそうになる涙を袖でそっと拭いて、エントランスから執務室に歩き出す。ここから執務室まで、この短期間で何度も歩いたから目を閉じていても辿り付けるんじゃないか、ってくらい道は覚えてる。

この通路を通り抜けて執務室に行くと、「また来たのか」って呆れた顔を浮かべてたけど。そのあとに必ず、「いらっしゃい」って優しい顔になるのはきっと私の特権だった。

コツ、コツ。廊下を鳴らす靴の音がどうしようもなく寂しいものに思えるけど、気にしないようにして歩く。

「あれ、シャーレの廊下ってこんなに長かったっけ……？」
　こうして歩いてみると、普段は気が付かない色んなことに気が付く。先生一人ではとても掃除しきれないはずなのに、妙に綺麗だから他の人が来てやってるかもしれないとか、掲示板には先生以外の筆跡があったりとか。
「先生にとって私って、数いる生徒のうちの一人でしかないんだ」
　それは、そうだよね。
　あの人はみんなから好かれてて、たとえ他の子たちが知らない一面を知ってるからってあの人からも特別な信頼をもらえるわけじゃないもん。そんなこと、分かってる。
　分かってる、つもりだったんだ。
「私にとって、先生は特別だったけど……」
　あの人にとって私は、手放しても気にしない子だったのかもしれない。想像だけでも泣きそうになるけど、泣くわけにはいかない。笑ってお別れするって決めたんだから。
　出来るだけ無感情に徹して、執務室の前に辿り着いた。
「せ……先生？　入るよ～……？」
　出来るだけいつも通りだとアピールしながら執務室に入る。これで目を合わせても流した涙を悟られないようにするために。
　ああ、でも。ダメだなぁ……。

「いない……」

急に足腰に力が入らなくなった。どれだけ力を入れようとしても、立ち上がるどころか動くことも出来ない。

扉が閉じて、今の心みたいに真っ黒な光景が目の前に広がってる。月明かりはここまで届かないで、私の居ないところばかり照らしてる。

この部屋にあの人が居ないって分かっちゃったら、立ってることすら出来ないんだもん。ずっと我慢してた涙だって、もう抑えるなんて出来ないよ。

「せんせぇ……」

この部屋には、たくさんの想い出があるもん。それをなかったことにするなんて、したくない……。

「うぁっ……」

これが、失恋ってやつなのかなぁ……。だとしたら、みんなこんな思いしてるの？

こんなに苦しくて、消えてしまいたくなるような思いをしてるんだとしたら、みんなすごいよ。おじさんには、耐えられそうにないからさ。

「あっ……」

不意に上半身すらも力が入らなくなって床に倒れそうになって、受け身を取ろうとする。でも、その衝撃はいつまでも来なくて。

「……？」

不思議に思って目を開くと、目の前に居る人に驚く。

「な……なんで……？」

「あー……探したぞ」

バツが悪そうに表情を歪めた先生が居た。いつもなら整ってるはずの髪はボサボサ、走ってたのか上気した顔色はどこか色っぽい……。

抱き着きたくなるのを堪えながら、なんでここに居るんだろうってずっと考え続けた。

あかつき

リンちゃんと別れてからキヴォトス中を探し回った。アビドスの面々に聞いてもホシノの居場所は分からず、見つけるのに時間がかかってしまった。

鏡を見ていないからハッキリしないが、今の姿は見るに堪えないだろう。ずっと走り回っていたから髪のセットは崩れているだろうが、そんなことを気にしてられない。

「……落ち着いたか？」

「うん……」

長い期間会っていないわけじゃないはずだが、少し憔悴しているホシノを見て申し訳なさとふらふらして危ないだろうという心配がないまぜになりつつも、俺に言う資格はないと口を閉じる。

それでも口にしないと伝わらない。でもなにを伝えたらいいのか、俺がタカナシになにを伝えたいのか分からない。

「無事でよかった、本当に……」

「……」

丈夫なキヴォトスの人間に言うには違和感はあるが、それでも無事でよかった。

元々、目を瞑れば次の瞬間には消えているような幼い精神性の持ち主だ。ツギハギだらけの心はもう既に限界で、その上で自分の手の中に残ったものだけでも守り通そうとするのは、齢２０に満たない身には酷なものがある。

　いつもはほんわかとした笑顔を浮かべている彼女は、今回ばかりは伏し目がちで視線を合わせてくれない。仕方ないとは分かりつつも、胸が締め付けられるような感覚がある。壊してしまったのは自分なのだと、言い聞かせてから渇いた口を開こうとしてから彼女が口を開いたのを見て耳を傾ける。

「先生……そのごめんなさい」

「……なにが？」

　不思議になって首を傾げる。俺が謝るのならともかく、ホシノが謝ることなんて、ないはずなんだ。瞳を覗き見ると、泣いていたことを加味しても虚ろで、景色を反射しているだけのように思える。これは……。

「先生がなんで私を遠ざけたのか分からないけど、秘密だって守るし、前みたいに戻るから。あの、シャーレの先生って思えた頃に頑張って戻るから。好きだって気持ちも、見ないフリするから……」

「お前……」

「……でも、毛布だけは欲しいかなぁ～。おじさんちょっと気に入っちゃって……」

ああ……。ホシノの表情を見れば、思っていたよりもずっとギリギリだったことが分かる。どうしようもなく自分が情けなくなって、涙を流すより前に、無理やり起こして横に担ぐ。いわゆる、お姫様だっこというやつで。

「……せんせ？」

驚いたのと同時に、少しだけ瞳に色を戻すホシノを横目で見る。

知り合いの女性の中でも特に軽いだろうホシノだが、両腕が悲鳴をあげているのが分かる。自分の非力さに心の中で舌打ちをして、いつも座っているソファにこちらにもたれかからせるように座らせる。

「……や」

いやいや、と首だけで拒否しているが、肝心の身体が動いていない。きっと、心が凍って動かなくなってしまったのだろう。

何事にも別れはある。だが、俺は相手の気持ちを無視して自分の都合のいいようにエンディング（終わり）を迎えようとした。メリーバッドにも満たないバッドエンドでは、誰も浮かばれない。

俺は、優しい物語が好きだ。

私も、ハッピーエンドが好きだ。

あの日の確信から得たものを、この子に伝えなくては。決意こそしていたが、もう少

しロマンチックな方が良かったのだろうと思ってしまう。

記憶の欠け落ちている部分では、もしかしたら似たようなこともあったかもしれない。ただ、今の自分には関係がない。

正真正銘、小鳥遊ホシノという女の子を個人として認識してしまった。

女の子は砂糖とスパイス。（Sugar and spice）

そして、素敵ななにか（And all that's nice）

そういうもので出来ている。（That's what little girls are made of.）そんな表現が古書にあるように、素敵な雰囲気で心の内を吐露するのがいいのだろうか。

いや、しかし……と解の出ない答えを求め、堂々巡りする思考を黙らせる。

それよりも先に、しなければならないことがあるはずだ。

能天気な頭から、大人の頭に切り替える。

「ホシノ、なにも言わずに。そのまま、聞いてほしい」

「……っ」

ビクリ、と震えるホシノは、闇夜に一人取り残された幼子のように見える。普段の頼りになる先輩は鳴りを潜め、目の前に居るのは歳相応の女の子だ。

そんな彼女を見て、手を握って安心させたくなる。今から言うのは、お前が今想像しているような悲しい結末なんかじゃないんだってことを。

「あの時、お前を否定してしまったことを謝る。ごめんな」

当時のことを脳裏で思い出す。あの時は自分の気付きにばかり目が行っていたが、あの会話なら本人が嫌がっているなら来なければいい、と言っていたような気がする。

そのことにショックを受けていたわけではないのだ。

「私は、シャーレの先生だ」

平等で、生徒のために文字通り一生懸命で……絵本の中から出てきたような、そんな偶像だ。

「だが、あの時俺は、自分の中の先生としての虚像が崩れてしまった感覚があった」

人に平等を求めるのは酷だ。なにせ、人によって話し方を変えるというコミュニケーションにありがちなものすら出来なくなるから。

人を捨てる覚悟をしているようなものだ。

あの時の俺はこう思っていた。シャーレの先生とは、誰もが望んだ虚像でなくてはならなかったのだと。

「なんで……だって、私が嫌なこと言ったから……」

「いつもの冗談だって、分かってたよ」

いつも通りは重いものだ。毎日を迎えられていることが奇跡だ……なんて昔の人は言ったそうだが、俺が言いたいのは。

「駄弁って、面倒な絡み方をして。そんな静かな時間の延長線上にあったことは」

それが日常になっていたことを、あの時になるまで気が付かなかったんだ。
「……誰が一番気に入っているか、ってことをあの時話していたよな」
もう既に決まっているその答えは、言い出すのには気恥ずかしく。おおよそ、先生として平等に接していないことの証明でもあった。
「だから、今。あの時の答えを返そう」
二人の距離は拳一つないほど近い距離。たった一つの秘密から、繋がってしまった想いと心。
そろそろ思っていた内容でないことに察しがついてきたのだろう。姿勢を正そうとして、結局こちらにもたれかかったままの彼女は、よく眠れていなかったのか目の下に隈があった。
そんな彼女に出来る限り優しく微笑みかけて、深呼吸を一つ。誰かに背中を押されなければ繋げなかった想いを、手を伸ばす覚悟を示す言葉を紡ぐ。
「俺が一番気に入っている相手は――お前なんだよ、小鳥遊ホシノ」
反応が気になってホシノの瞳を覗くと、いつもの細められた目とも、先ほどの光を無くしたものとも違うその表情は、涙で潤んでいた。
訳の分からない好意というのは恐ろしいものだと、知っている。それでも、今度は逃げないために目を逸らすことなく見つめる。

「なんで、よりにもよって私なの……？　もっと、良い子たちは居るじゃん……」
「そうかもな」
「私、面倒な子だし……」
「一回逃げてるんだから俺の方が面倒だろうよ」
　左右で色の違う瞳は潤んで、彼女が女の子ではなく、女性としてその一歩を目の前で踏み出している。
　躊躇いがちに撓垂れ掛(しなだれかか)っているが……震えているせいで身体を寄せているようにしか見えないかもしれない。
　だが、これでいい。どうせ器用になんて、お互いに出来ないんだから。
「俺は、シャーレの先生として振舞っている限り、一個人に特別な感情を抱いてはいけないと思ってた」
「それが、あの時の……？」
「ああ、情けねぇよなぁ」
　苦笑しながら頷く。勝手な話だ。ズルい話だ。
「だがまぁ……誤魔化すのも無理だからな。こういうの、男からって相場は決まってるだろ？」
　視界に捉えるだけで、胸が温かくなるこの気持ちを、知らないフリは出来ない。面映

ゆく、どうにも肩が凝るこの感情の名前を俺は知っているのだから。
「正直さ、最初に俺がバレたときは面倒なやつに見つかったなって思ってた」
「それは、他の子の方がよかったってこと？」
「まさか。今はよかったと思ってるよ」
小鳥遊ホシノという女の子は、秘密を守ることに際してある種誰よりも信頼が出来る。なぜなら、もう既に様々なものを背負っているから。余分なものを背負わせるのは、先生として許容できなかった。
なによりも、個人的に彼女のことは苦手だった。考えていることが分かるが故に。
今や関係性が変わり、また別の一歩を踏み出そうとしている。おそらく、先生としては許されることではないのだろう。
だから、これから先は俺のワガママ。
「それまではさ、お前のことが苦手だった。子供が背伸びしていることほど見ていて辛いものはねぇし……俺が、通って来た道だから」
シャーレの先生としての立場がなければ、関わるの自体を避けていた。
変わってしまったのは、なにがきっかけだったのだろうか。
「でも、いつの間にか。お前との時間がなによりも心安らぐ時間になってた。もっと一緒に居られたら……って。そう、思うようになってた」

「……うん」
「あの時気付いて、逃げちまったけど……今度は、逃げないし逃がさない」
ちゃんと手を繋いでいれば、引き離されるようなことがあっても、お互いに引っ張りあえるはずだから。
「タカナシ。俺と、一緒に居てくれるか」
「うん……うんっ……！」
熱に浮かされたように懸命に背中に手を回す彼女を抱き留める。
「私、不安だったんだよ？　急に拒絶されて。もう会っちゃいけないんだって思ったんだから……！」
「……悪い」
詰られて当然だ。なにをしたら、許してくれるのだろう。
「許してほしかったらさ。……分かる、でしょ？」
媚びるような声色で誘ってくる。化粧なんてしていないはずなのに妙に色っぽく見える唇に引き寄せられるまま……。熱を伝え合った。
まぁ、なんだ。幸せにしたいな、なんて。月並みな誓いを心の中で想いながら。
きっと今の俺が、どんな俺よりも、幸せなのだから。

第二章：「未定の旅路」

おつきあい

タカナシと、生徒と。付き合うことになった。

ひとことで言ってしまえばそんなものだが、何日か経った今でも現実味がなく、そのことを考えるだけで浮足立つような感覚になる。女性に慣れていないわけではないが、生徒と付き合っているというのはどこか背徳的で、後ろ指刺されないか冷や汗をかくのは悪いことじゃないはず。

まぁ、それが相手と距離を取る理由ではないわけで。出来る限りお互いを尊重している。

「センセー、ちょっと隣に来て？」

「ああ、どうした？」

ソファに座っていたタカナシが隣をとんとん、と叩きながら手招きするのに誘われて、溜息を吐きつつ端末を持って席を立つ。

付き合う前は出来る限り距離を置いていた。精神的にも、物理的にも。時間を共にしていたとしても、最低限のラインだけは守ってきた。告白したあの日から曖昧になって

はいるが。
　現に、そっと隣に座るとこちらに身体を預けてくる。
「んー、極楽だねぇ～」
「仕事してる人間の肩なんて安定感なくて休めないだろうに」
「いやいや。心がだよ～」
「まぁ、否定はしないけどな」
　人と触れ合うというのは、どこか心に安らぎをくれる。スキンシップが特に好き合っている同士で重視されるのも分かる。そういう理屈を抜きにしても、自然とくっついているのが恋人同士なのだが。
　心の仮面を上手いこと利用して自分を騙していた俺が言うのもなんだが、理屈だけでは恋人ではいられない。いや、もっと言えば。それだけではそもそも人とは関われない。恋愛や人間関係に公式なんて存在しないんだから。
　そもそも、中身が露呈してから3か月も経っていないのに付き合っている時点で公式があったとしても外れていると言わざるを得ない。
「……お前どこか行きたいとか、ないのか？」
「えー？　んー……」
　かわいらしく目を瞑って考える彼女を横目に、なにを要求されてもいいように仕事を

進めていく。仕事があるから、で断ることほどお互いにとってどうしようもないことはない。

世間に相手が苦手だからで吐かれるウソがある以上、もし仕事があっても無理をしない範囲で手短に済むようにしておいた方がいい。

背伸びしたところでいいことはないからこそ、時間を確保出来るようにちょっとだけ頑張るのは大切なんだから。

「んー、特にないかな」

「……本当に？」

「うん。誰かさんが逃げないようにするだけで幸せだから」

「そうかい」

バツが悪くなって口をへの字にしてから仕事に戻る。実際、こちらが一度あの関係を解消しようとしたのが彼女を悲しませてしまった原因だ。外から見たら思春期と笑えるかもしれないが、こちとら成人しているのだから呆れられて終わり。

そうやって言い訳の出来ないように逃げ道を封じた上で隣に居るのだから、ふんわりほわほわと笑顔を浮かべている普段からは想像できないくらい、意外に強かなことに笑ってしまう。

「じーっ……」

「……なんだよ」
「ううん、目の前にか……かのじょ、が居るのに。ずーーーっと仕事してるぼくねんじんさんのこと、見てるだけだよ～？」
「いや、お前が居る時間に仕事禁止されたらシャーレ止まるっての」
　恋人になってから少しの期間は距離感が掴めずにしどろもどろになってしまうカップルが多いのだが、俺たちの間ではそういった空気になることもない。むしろシャーレに寝泊まりしている。最低限、学校には行って後輩たちと一緒に居るようだが、それ以外の時間はずっとシャーレに居る。
　時折浮かべる気恥ずかしさからくるだろう呆けた顔でそういった経験が皆無なのは分かるが、背伸びして頑張っているようで微笑ましくもあり、疲れたりしないかと心配にもなる。
「だとしてもさ」
「夜の時間は大切にしてるだろうが」
「よ……夜の時間……」
「おい待てなんでそこで赤くなる」
　頬を赤らめて幸せそうに微笑むタカナシに思わず手を止める。まるで大人の時間を夜に過ごしているような空気だが、断じて手は出していない。

酒とタバコと女は大人の世界の常識ではあるが、こちらの世界に無理して付き合わせることはないと感じてただ話をするだけに留めている。

「んー、なんだろうね。照れちゃった」

「お前、人の前でそんな反応するなよ……」

それでも幸せそうにするのだから、こちらとしては少ない時間で頑張って仕事を処理している甲斐はあるのだが……本来の夜の時間、という言葉はおろか、恋人のＡＢＣを知っているかどうかすら怪しい。

今度性教育をするべきだろうかと思いつつ、成人男性が未成年のそれも女の子に性教育をするという絵面が首輪通り越してマズい飯を食わされることになりそうでお手上げ状態。

女性の恋愛トークは男性のソレとは違って具体性があるものだから、そのうち誰かが教えてくれるのを祈っているのだが、生徒たちは過激かむっつりか、それこそ知らないかの三極化して混迷を極めているせいで、どう転んでも面倒しかないことに溜息が出る。

せめてマシな相手に教えてもらってくれ、と密かに祈ってタカナシを観察する。

「……お前、現状で満足なのか？」

「んー、センセの時間もらってるだけで、十分だからさ」

必死に悟らせないように努めて幸せそうに表情を和らげてこそいるが、そこにある寂しさだとか構ってほしいといった気持ちだけは隠せないのが長い間生徒を見ていた観察眼で分かる。

仮に観察眼じゃなくても、ある程度までならタカナシのことが分かったりもするが、分かったつもりと阿吽の呼吸は似て非なるものだから、それは気を付けなければならない。

「じゃ、こうしてやろう」

抱き上げて、膝の上に乗せてやると慌てたように身体を揺らす。嫌ではないのか、

「ちょ、センセ……仕事してたんじゃないの？」

「休憩。あとお前が寂しそうだった」

「うーん、先生には分かっちゃうか～……」

「お前のことはちゃんと見ているからな」

生徒に対して目をかけるのは当然。ならば自分の大切に思える人間には不満や不安を積もらせないためにより一層見てやるべきだろう。

「へー……ふーん……そ、そっかぁ～……」

優しい顔に隠れているが、僅かに口元が緩ませてあどけない笑みを浮かべているのが背中越しになんとか見える。声色だって分かりやすいくらい弾んでいて、そんな反応を

見れば正解だったんだろうことが分かる。
　仕事時の背筋を伸ばした状態から、ソファに身体を預けると、タカナシも身体をずらして落ち着く姿勢を何度か試してリラックスしたように背を身体を預けてくる。
「うへ……。これが幸せ、ってやつなのかな」
「……そーだな」
　素直に肯定するのが気恥ずかしく感じて適当な返しをしたのに、振り返って満面の笑みを浮かべられると自分の捻くれた性格に呆れて肩をすくめる。
「恋人、って。どんなことやるんだろ」
「んー。そーだな……」
　手を繋ぎ、デートして。同じ時間を過ごしてお互いを知ってから、良い雰囲気になったのなら身体を重ねて熱を確かめ合う。現実では必ずこの通りに行くものではないが、だいたいはそんなもの。ただ、最後を安易にするわけにはいかない、とも思っている。大人としてはもちろん、俺個人の考えとして。
　古臭い、それこそカビのようなニオイすらする価値観だが、好きだからはい身体を重ねましょう……なんていうのは無責任なのではないかと思う。現実で未成年に手を出してはいけないとされているのは、そのあたりが自己責任に出来るからだ。
　未成年だから手を出さないのか、と言われれば違う。

これは俺のエゴだが、手を出すならそいつの人生に対する責任くらいは持たないといけないと考えてる。カス人間だからこそ、そこは譲れない。

責任や覚悟はそんな簡単に背負えるほど軽いものじゃない。長い時間をかけて、少なくともそう思えるまでは手を出すつもりはたとえ成人していてもありえない。

「まぁ、色々だろ。色々。俺たちなりにやってけばいいさ」

「でも……」

「それに、こうなる前から。恋人っぽいことは大方やってるさ」

最後の一線を除いて。デートはして、お互いの時間を共有している。前に進もうがなにをしようが、冷静になって考えてみるとある程度はやっていたわけだ。

だが、一個だけ。やっていなかったことがある。

「ちょっと手出せ」

「はい。どしたのせん……せ……？」

差し出された手を握って、それぞれの指の間に自分の指を差し込んで握りこむ。いわゆる、恋人つなぎというやつだが、そういえばしたことがなかったかもしれない。

「あ……え……？」

「な、俺たちなりでいいだろ？」

悪戯が成功した子供のような表情で煽っても、ぼんやりとした表情でこちらを見るだ

けで反応すらまともに返せていないことに苦笑する。
こりゃ、俺の価値観以前にしばらくは無理だろうな。

あんしん

ほぼフルタイムで入り浸っているタカナシのせいで実感は薄いが、シャーレには多くの生徒たちが出入りする。行政では解決してくれないものを解決する便利屋のような側面を持つから実のところ、シャーレの外に居ることの方が多い。

まぁ、端的に言ってしまえば女の子と接する機会が多いわけで。グループと一緒に居ることはもちろん、狭い部屋に二人っきり、ということも少なくない。

恋人が居てこんなことをやっているなんて……と後ろ指を指されそうなものだが、シャーレの先生としての振る舞いをやめてしまえば少なからず変化があったことを周囲に悟られ、この立場を追われる原因になるかもしれない。道を選択したからといって、元々の道を完全に捨てることもないと思って仮面を被り続けている。

もちろん、誰にも打ち明けられない以前とは負荷は全く違う。以前は光のない暗闇を歩いているようなものだった。本当に、感謝してもしきれない。

「先生。最近付き合いが悪い気がする」

「え……なにその女子高生特有の同調圧力みたいなの……」

アビドス高等学校。砂漠に沈みかけている学園で、既に本校舎は砂に呑まれ、生徒数

も5名と他の学園と比べなくてもほとんど廃校のようなもの。連邦生徒会での発言がほぼ皆無なため、シャーレの先生としての権限を使っても出来ることはほとんどない、そんなところ。

権限ではなにも出来ないからといって、その身で出来ることがないわけではないから定期的に訪問して調子を確認している、アビドスはそんな場所の一つで、今日はちょうどその日だった。

「シロコ、ちなみにどうしてそう思ったの?」

目の前に居る人間――砂狼シロコの外見を眺める。空色の瞳はよく見れば瞳孔の色が違うオッドアイ、人形と見違えるほど端正な顔立ちを支える灰色のミディアムヘアはボリュームがあり、毎朝早くに起きてしっかりセットしているのだろうことが想像出来る。男性と女性はセットする時間がだいぶ違う。

それを毎朝整えるのは相当な努力だろう。

この世界の子たちはしっかりと見ればしっかりと整えるための努力をしていることが多く、化粧品の話題で盛り上がることも少なくない。

その中でもおすすめされる確率が高いのは香水。何度かおすすめされたものを試したが、以前まで使っていたものが一番で戻してしまう。それを見て残念がる生徒が相当数居るのはどういうわけなのだろう。こういうのは深く考えると負けなので思考停止

しておくことにしている。
「ん、だって最近、ここに居ることあんまりない」
「……そうだったかなぁ。自覚ないんだけど」
以前と特に変わりないはずだ。対策委員会の顧問として精神的にも時間的にもこの子たちとしっかり向き合っているはず。そうだというのに、彼女がそう感じたのはどうしてだろう。
砂狼シロコという人物は、表面だけ見れば発想や行動がぶっ飛んだトンチキ女で、真のアウトローなんて一部生徒から言われたりしている。それは一部事実で、一部間違いだ。
彼女は手段を多く持たないだけ。子供なだけなのだ。普段言っているトンチキも、現実的なプランを背景に提案してくることから、根幹はしっかりしているも言える。だから、正面から向き合って言語化してやればおおよそしっかりしたものが出てくる……と、思いたい。そうだといいな。
「それに、先輩だってあんまり居ないし」
「先輩？」
「ん、ホシノ先輩。最近アビドスにあんまり居ないって、みんな心配してる」
「あー……」

あまり気にしてこなかったが、タカナシの居場所は本来ここだ。今でこそすっかりシャーレで昼寝するくらいに入り浸っているが、彼女はアビドス対策委員会の長、つまりはリーダーだ。対策委員会の頭で、欠ければみんなが散り散りになってしまう。

そんな未来を確信させるほどには大切な人間。それなのにタカナシはここに居らず、シャーレに居続けている。後輩に寂しい思いをさせてまで、やらせておいていいのだろうか。

「本人は、なにも言ってないの？」

「ん……、ホシノ先輩、自分がどこに居るかとかあんまり言ってくれない」

「あー、まぁ、そうだねぇ……」

彼女はしっかり者のように思えて、勝手にふらふらどこかに消える風の前の塵のような存在。彼女がふらりと消える様子に、何度困らせられたか分かったものではない。

俺も人のことは言えないが、彼女の方こそ、ちゃんと捕まえておかないと消えてしまいそうだと常々感じている。

だが、現状を対策委員会の子たちに寂しい思いをさせてまで維持していいものかと問われれば少し悩む。

天秤にかけることが出来ている事実に驚きを隠せない。以前の自分であれば、是非もなく生徒のためになることを選んでいた。その結果がタカナシを泣かせ、自分自身すら

傷つけたあの過ちなのだから、もう二度と繰り返してはいけない。
「心当たり、ない？」
「えーっと……」
真っすぐな目を向けられて、思わず逸らす。視線というのは口ほどにものを言う、とはよく言ったもので、後ろめたいことがあれば意識していても相手の目を見ることが出来なくなる。
そこで、以前タカナシから俺の匂いがするとシロコが言っていたらしいことを思い出して苦い顔をする。下手なことが言えない。
「聞けないなら、こうする」
そう言って腕に組みついて胸に抱き寄せられる。なんだか柔らかい感覚があるような気がするが意図的に無視して引き抜こうとして……いや無理だわこれ力強っ!?
「あのー、シロコさん。出来れば離していただけるとですね、非常に嬉しいのですがね……」
「大人の男の人はこういうの好きって聞いたんだけど」
「ノーコメント」
実際のところは悪い気はしないが、それとこれとは話が別。相手が居るのなら出来るだけ相手を悲しませないようにしたい。

それはそれとして、分かった上で聞かれている場合はどうしたものか。誰か助け舟を……と考えていると、部屋の扉が開いて見慣れた淡い髪の色が見える。
「やぁ、た……ホシノ」
「あっ、先生〜。……シロコちゃんも居たんだね」
あっぶね。普通にタカナシって言いそうになった。
少しだけ不服そうな色を滲ませていた気がするが、すぐに切り替えて柔らかいいつもの笑みが見える。あまりにも一瞬過ぎて見間違いかとも思うが、そうではないのだろう。
この状況になにも思わない方が達観しすぎているから、恋愛面では普通の女の子なんだなと安心するのだが、不満を貯めさせてしまうことに変わりない。
さっさと振り解きたいのだが……シロコの膂力に勝てない。
「ん、先生に問い詰めてた」
「そっか〜、先生悪いことでもしたの？」
「私が悪い前提なのが納得いかないんだけれど……」
悪かろうが悪くなかろうがお前が悪いと言わんばかりに胡乱な目をするタカナシに降参するように空いている片手を挙げる。
その手に自分の手を伸ばしながら精一杯背伸びしているタカナシに首を傾げる。お

前はいったいなにをしてるんだ……とりあえず視線の高さまで下げてみる。すると、手を合わせてにへら笑いかけてくる。

それがどうにも可愛らしく見えて、静かに微笑む。きっと、先生としてのものとは違う笑顔を向けているのだろう。

「……っ」

伏せながらもちらちらと様子をうかがう彼女の姿を見ると、可愛らしくて抱きしめたくなる衝動に駆られるが、シロコが目の前に居ることを思い出してすんでのところで止まる。

宙に浮いたままの腕に不満そうな顔をして、そっぽを向かれる。

「ん、先生のとこに居たんだね。ホシノ先輩」

納得したように頷くシロコは俺のところに来ていたのだと思い至ったらしく、感情の読めない瞳を向けてくる。ちょっと分かりやすすぎただろうか。これではいつまで隠しておけるのか怪しい。

「えっと～……なんの話？」

「ホシノがあんまりここに居ないって話」

「えっと、そ、そうだったかも～……？」

「自覚ないの？」

「誰かのせいで時間が早く過ぎるからさ～？」
「えぇ……？」
いつもと同じような優しい笑顔でも、ほんの少しだけ向けられる色が違うのに気が付く。
俺のせいなのか、それ。体感時間ってのはそんな簡単に……。
いや。俺もタカナシと一緒に居る時間は楽しいし、自然と過ぎていく。そのせいで、仕事に支障が出て遅刻しかけたことも少なくない。そこまで気が付いてしまうと面映ゆい気持ちになって、軽く咳払いをする。
「私のところに来るのはいいけど、心配してくれる後輩も居るんだから、居場所くらいはちゃんと教えてあげようね」
「おじさんは先生の方がよっぽど心配なんだけどな～？」
「私の方こそ、ホシノのことが心配だよ」
俺と一緒に居て、本来の居場所が失われるようなことがあれば。それはきっと許されないことだ。俺のような人間よりもっと、良い人間はたくさん居る。それでも俺がいいと言ってくれていると分かってはいるが、たった一度の青春を犠牲にしてまで一緒に居るのは正しいか、と言われれば疑問が残る。
当人がよければいいが、こればかりはこれから気を付けてやるべきことかもしれな

い。

「ん、よかった……」

そんなことを思いながら、結局シロコがなぜ安心したような優しい表情をしていたのかだけは分からなかった。

まどろみ

「おいタカナシ……いい加減俺の部屋から出ないか?」
シャーレの執務も一区切り付いて戻ろうとした昼下がり、人の部屋を平然と占領している彼女様に呆れを隠すこともなく注意する。
わざわざ仕事がひと段落するであろう時間に学校をサボってまで来ているのに呆れたらいいのか、そうまでして俺との時間を大切にしてくれていることに嬉しさを覚えたらいいのか分からなくなる。
「えー、だって。先生って放っておいたらどこかに消えちゃいそうだし。ならずーーっと見てたら安心だと思うんだ～」
「消えそうなのはお前だよ。次勝手に消えたら引きずり戻して手くらいは出るぞ」
人のベットの上を占領して、そんなことを言ってくるタカナシは普段はふんわりさせている髪を少し潰しながら毛布を被っている。
何度したか分からない問答をしているのは、スタンスを確認するため。お互いが束縛しておけば、勝手なことをしていても繋ぎ止めていられると、彼女は信じているのだろう。その証拠に、この話をするときは僅かに瞳を潤ませ、恨めしそうに睨んでくる。

敵に向けるような憎しみの籠ったものではなく、まるで子が親に甘えるような。親しい人に手を伸ばすような視線に心の中でなにかが動きそうになるのを感じながらも、努めて平静を装う。

「なんだったか、共依存とか言ったんだっけなこれ」

タバコの火付けながら横目でタカナシを眺める。秋口に入った外の空気は生命の息吹こそ感じないが、春とはまた違う新鮮な空気が立ち込めている。

以前まではタバコを吸っているときは必ず青空を眺めていたはずなのだが、いつの間にか彼女を視界に収めながらタバコを吸うようになっていた。

それで言えば、仕事もそうだ。必ず執務室の方でやることにしていたが、タカナシが四六時中くっついてくるせいでたまに自室で仕事するようになった。執務室に居ないから、ここに俺が居ないと勘違いした生徒が書置きを残していくことが増えた。

正直、そうして追い返してしまうのは申し訳なさがあるからせめて執務室で作業したいのだが。

「ん～……極楽だねぇ」

「よかったな……」

そりゃ、人のベッド占領して、買ってもらった毛布被ってたら極楽だろうよ。そう思いつつも、柔らかな笑顔を浮かべている彼女を見ると、なんだか仕事の苦労が報われる

ようで、だがそれが腹立しくて。タバコの火を始末してベッドに近寄る。
縁に腰掛けると不思議そうに見上げてくるホシノの頭を撫でながら、髪を梳いて形を整える。今俺はどんな表情をしているんだろう。幸せを噛みしめているような表情をしているのだろうか。少なくとも、心ではこの時間がどうしようもないほど愛おしくて、永遠に続けばいいのと願っている。
その気持ちが伝わる表情をしていたかどうか分からないが、照れたようにはにかんで毛布を被り直す。恥ずかしさはあっても、それでも頭は撫でた方がいいのか顔だけ出してぐいぐいと手に押し付けてくることに愛おしさを感じながら、頭を撫でてやる。
髪を触れると女の逆鱗に触れるとはよく言ったものだが、タカナシは今までずっと、嫌がった様子はなくむしろ積極的に頭を撫でさせようとする。積極的、とは言っても服の袖を引っ張ったりと一般に言わせれば控えめもいいところなアピールなのだけれど。
「最近、さ。思うことがあるんだ」
「ほーん」
「その、聞いても笑わないって約束してほしいな～……？」
「ああ、まぁ。抱腹絶倒の話が出てくるなら別だが約束する」
「そんなの出てくるわけないよ」
頬を膨らませて拗ねるタカナシをこれでもかと撫でまわしてから手を握って言葉を

待つ。こうして冗談のひとつでも言ってやれば、普段よりは言いやすいだろう。こちらの反応を伺うようにちらりと見てから、恥ずかしがるようにぽつぽつと話し始める。
「なんだろ、あのね。みんなが、ズルいなぁって思って」
「みんな？」
「うん。シロコちゃんとか、ここにいっつも来てる子たちとか」
「あー……」
「先生は、シャーレの先生として居たいって分かってるから、出来るだけ迷惑かけないために頑張って我慢してるんだけど……これじゃまるで。私だけが一人みたい」
「対策委員会のみんなが居るのにか」
「先生の、隣が。……いいのに」
疎外感のようなものを感じているのかもしれない。
他の人間が居る前でのタカナシは秘密を知る前のお互いを演じているようで、必要以上にひっつきはせず、まるで保護者のような表情を浮かべて輪に入ろうとしない。それでも寂しさを消せていないことだけはきっと俺だけが知っていること。
タカナシとしてはこうやってお互いに背を預けられるような距離感でみんなの前でも話したいらしい。そんなことをしたら特定個人を贔屓にしていることがバレるから気を遣ってくれているが、やはり過度なスキンシップが目立つ生徒たちを見て思うとこ

ろがあったんだろう。
いじけたような彼女に嗜虐心を刺激される。
「つまり、なんだ。寂しいって言いたいのか？」
「うへぇ……うん、そういうことかな……」
いつの日かに買ってきたクジラのぬいぐるみを膝で大事そうに抱えながら寂しそうに笑うタカナシを見てどうしようもないことだと自分に言い聞かせる。立ち振る舞いは自分の合わせ鏡だ。現状で幸せなのだから、これ以上を望むのは難しい。
人生に幸せが限られているとはよく言った話。スピリチュアルを信じる気持ちはないが、実際そうだとも思う。いいことのあとには、ほとんどの場合悪いことがセットになっているものだ。自分が気付けるか気付けないかを含めて。
「みんな、ありのままで一緒で先生と居られるのに私だけ誤魔化さないといけないのは、寂しいし辛いんだよ？」
寂しいと言われると弱い。男は大切な誰かのためなら女が呆れて物も言えなくなるようなバカをしてしまう生き物だ。
それでも、はいそうですか。なんて言えるものでもなかった。
バカとハサミは使いよう、というやつである。
「問題は、お前にないことだけは分かっておいてくれ。俺の元の性格がシャーレの先生

という器に足らないというだけの話だ」
「いっつも思うんだけどさ、な～んで自分のこと卑下するのさぁ……」
「ぐぬ……お前と似たモノ同士だからだよ」
自分のことを卑下して本来より下に見ている者同士だからこそ、どこか信頼出来るのだろう。
だが、気まずい沈黙を続けてお互いの気持ちを通じ合わせないことの方がそれこそバカというもので。両手で頬を挟まれながらジト目で責められても話を続ける。
「お前、俺のことを最初に見たときどう思った」
「え？　うーん……私と同じなんだなぁ、って」
「ああ、だからこそ。言葉遣いは人遣いだからな。そういう人間には誰も付いてこない」
「……もー。私はちゃんと付いていくよ。どこにでも。だから、そんな寂しそうな顔しないで？」
「こういう顔付きだっての」
溜息を吐いて目を細めると、それがおかしいのか俺の黒い髪に生糸のような指先を通して頭を撫でられる。鬱陶しさよりも心地よさが先に来て唇を結ぶ。
ただただ微睡むような心地よさに身を任せそうになるのをすんでのところで堪える。
寝たらこの話を二度と出来なくなる気がする。

「……まぁ、なんだ。お前の前以外でこの顔をすることはない。それで、許してくれないか？」
「んー、それじゃあ足りないかな～」
ニッコリと笑うタカナシは太陽のように明るくて、目を細める。
「寂しい思いするんだから、いっぱい……その、可愛がってね？」
いじらしいことを言ってくれるこの子に出来ることはたくさんあるのだろうと思う。ただ、それは俺のエゴ。そして、隠すのもエゴ。せめて、一緒に居れる時間を作ろう。
「だから、そう。これは仕方ないんだよ～」
「ちょ……力強いっての……!?」
腕を掴まれて、ベットに引きずり込まれ、そのまま胴体を手足で拘束される。まるで抱き枕のようにされているが、普通逆ではないかとも思う。力関係で勝てないのでこれで正しいのかもしれないが。
「ほら……力で勝てないんだから仕方ない……でしょ？」
「……はぁ。分かった」
結局タカナシのことを元の場所に戻せない自分に苦笑しながら、瞳を閉じてからしばらくして胸元に温かいものが当たったことに気が付いてそのまま抱き留める。
これでは手を出しているのと変わらないな、と苦笑しながらも悪い気はせず。疲れも

あってそのまま意識が途切れてしまった。

いまとむかし

光も届かない暗闇。暗闇のような光も届かない場所。ここに踏み入ればもう二度と戻ることさえ叶わないかもしれないことをしりつつ、モヤのかかる視界を振り払う。あの場所に私じゃなくて、ユメ先輩が居てくれたなら。先生も今よりもっと良かったんじゃないかって。

たられば、って言われる毒はゆっくり身体を駆け巡って、確かめていくたびに本当にそうなんじゃないかって思うようになっていく。

この考えは先生と出会うより前からずっとあって。だけど、先生が少しだけ変えてくれたんだ。見たこともないはずの水底に沈んでいく身体を引っ張り上げてくれるのは、いつかの日に見た先生の手。一緒に居てくれる先生じゃなくて、みんなの前の先生の手。

この手はいつ差し伸べられた手だったっけ。

ああ、そっか。みんなと一緒に助けにきてくれたときだ。ゲマトリアの黒服に、大人に。また騙されて捕らえられたあのとき。みんなが差し伸べてくれた手を取ってアビドスに帰ったけど、みんなの前では眩しいものを見るような笑顔を浮かべてからタブ

レットを弄って難しそうな顔をしているだけだったのにその夜の優しさに、心が奪われちゃったんだ。

「あーあ……やっちゃったなぁ……」

みんなからいっぱい怒られて、泣かせちゃって、よかったって言ってもらえた。帰ってこれてよかったと心の底から思えてる。

でも、先生だけはずっと能面だった。一瞬だけ笑ったけど、それだけ。ただ淡々と、後片付けをするみたいに手を動かしてた。声をかけられた時だけは表情を動かしてたけど、それ以外は感情が見えなかった。あれはいったい、誰なんだろう。

あの人の手からすり抜けるように振り絞った浅知恵は、届かなくて。失ったものは確かにあったけど、それでも私はここに居る。手放されなかったのは後輩の子たちが頑張ってくれたからなのは間違いないけれど……一番は、あの人が居たから。

みんな手を握ってくれた。助かってよかったって喜ばれた。でも、あの人の手だけは、温もりだけはもらえてない。

顔には出してないけどきっと、怒ってるんだろうなって思う。だから表情を崩してないんだって言われたら納得いく。

「電気も付けずに居たら気持ちまで暗くなるよ」
　優しい声が聞こえる。誰にでも無条件で手を差し伸べて、散々傷付いてるのにそれでも伸ばすことをやめない強い人の声がして、肩を震わせる。
「そうだね。あっ……みんなは？」
　聞いたら困ったように溜息を吐いて、瞳を閉じるのが見える。初めて見る顔で、ちょっとドキドキする。
「全員買い出しに行ってるよ。みんなで先輩奪還のお祝いをしようって張り切ってた。一応会計は私のカードから出すように言ったけど……いくら使われるんだろう。先生って思われてるより安月給なんだけどねぇ」
「あはは。なら渡さなければよかったんじゃない？」
「それはそれで違うと思うんだよね。頑張った子にはそれ相応のご褒美があって当然、でしょ？」
　優しい顔で窓の外を眺めているように見えるけど、あれはどこを見てるんだろう。まるでここじゃないどこかに心を置いてきてるような……。
　そんなこの人を見ていると、誤魔化せるような気持ちになるけれど。でも、このままじゃダメだ。頑張ったいい子にはご褒美をって言うなら、人を裏切った悪い子の私は、ちゃんと謝らないと。

「……先生」
「うん、どうしたの？」
「ごめんなさい……一人で、勝手なことして……。結局騙されちゃって、先生に。みんなにも迷惑をいっぱいかけちゃってさ……ほんと、バカだよね私。本当に、全部が……無駄だったんだ……」
　違う。こんなこと言いたかったんじゃない。私はただ、謝りたかったんだ。悪いことして、迷惑かけてごめんなさいって。だから、もっと迷惑かかるようなこんなこと言ったらせっかく手を差し伸べてくれたのに次がなくなっちゃうじゃん。
　次、かぁ。私、次があることを期待しちゃってるんだ。みんなへの、先生への手紙で大人のことが嫌いで、それでもあなただけは違ったねって言った挙句に助けられちゃったのに。
　あーあ。私って本当にダメだなぁ。ユメ先輩みたいになんてなれそうにないや。
「はぁ、引っ張り出すつもりもなかったんだがねぇ……」
「え……？」
「いいかい、ホシノ。君がみんなのために必死に悩んで考えたことは、無駄じゃなかった。したことだって、ちょっとやり方は間違ってたけど。それでも君はバカじゃない。自分勝手、なんかじゃないんだよホシノ」

そうかな……でも、結局みんなに迷惑かけちゃったし、借金の話も結局解決しなかったし……。これを無駄って言わなければ、なにが無駄なんだろう。

これを言ったら肯定するような言葉が紡がれてしまう。だから必死に歯を食いしばってなにも口から出ないように堪える。

丁寧に整えられた手をごちゃごちゃにして、普段しているメガネを外して片手を瞳に当てて溜息を吐いてる。ちゃんと魅力のある大人ってこんなに綺麗なんだってドキドキするより前に、やっぱり怒ってるんだって胸がきゅうっと締め付けられる。

怒られないように無理やり口を開こうとしてなにも口に出来なかった。

だから、先生の口が声を発する方が先だったんだ。

「……ごめんね」

「えっ……」

目の前に居たのは、想像していたような厳しい姿なんかじゃなくて。もっと小さな、後悔してる人間の姿だった。

拍子抜けという言葉すらも生温いくらいの衝撃に呆然としちゃう。

「私は君に言ったよね。私がどうにかするから、って。それなのに……私は、なにも。そう、なにも。出来なかった」

訥々と、まるで教会でシスターに向けて懺悔するような先生に冷静な私が疑問を浮か

べる。だって、そうでしょう？

今回やらかしたのは私で、先生はこんな私を救ってくれたすごい人。第三者に判断を委ねれば絶対に私が悪いと言われる状況で、それでもこの人は自分が悪いと譲らない。

「私が。私がもっと、しっかりしていればこうならなかった。こうなるのなんて、分かってたんだ」

この人が向ける平等は、自分自身には向けられていないのだと思い至ると、不思議な熱が胸に宿る。なんだろ、これ。

不思議な気持ち。泣きそうになってるけど、ダメ。ここで泣いたら先生が自分を責めちゃうから。

「ごめん。ダメな大人だ。私は……かつて目指した憧憬には、辿り付けそうも……」

「……ちがう」

なにも口にしないように噤んでいたのに。それを崩したのは他でもない自分の意思だった。掠れた涙声はいつもとは比べ物にならないほど弱弱しくて、冷静な自分がなにをしているのかと呆れ果てている。胸の内にひんやりとしたもの差しても、すぐに熱いものに変わる。

「ちがうよ……先生は……せんせいは、悪くなんて、ない……」

言葉が途切れる。伝えたい言葉が、想いが伝わらなくなっちゃう。止まりそうになる

口をなんとか回して、零れ落ちる涙を必死に拭う。
「私が悪いんだよ……勝手に一人でやろうとしたから……頼れる人だって、居たのに」
「それは違う。私は……」
「違わないよ……！　先生は、私なんかのために……来て……くれて……！」
まだ、言えてない想いがあるんだ。
「先生は……どうにかするって……言って、くれたのに……！」
ありがとうって、まだ言えてない。それなのに。
「私が……私が、勝手……に……ひぐ……ごめんなさい……せんせぇ……うぐ……う……うぅ……」
涙が溢れて止まらない……ユメ先輩が居なくなったときだって、こんなには泣かなかったのに。この人に迷惑をかけてしまった、その事実が今更胸に突き刺さる。身体が冷たくなって、このまま死んじゃうんじゃないかなってくらいに。
そうしてしばらく。それでも止まらない涙でグローブが水気を帯びてきた頃。唐突に頭を撫でられて、ゆっくり視線を上げる。
「ほら、瞳閉じて」
「う、うん……」
ハンカチで目元を何度か吹いて、優しい笑顔を浮かべる彼に見惚れて冷たかったはず

の身体が、心が。ゆっくりと温かいものに包まれる。
「あの手紙の中で、なんかダメな大人来たなんて第一印象だって言ってたよね」
「……うん」
黒服との取引に応じるって決めた日に机の上に書き置いた手紙に書いた内容。ちゃんと読んでくれたんだ。
「正直ね、私は君のことが苦手だった」
「え……？」
「斜に構えているし、聞いてくれてるかイマイチ分からないし……」
遠い目をする姿を見て、それが本当なんだって気付かされる。こういうのって、普通は慰められたりするんじゃないの……？
「でも一緒に過ごしてるうちに君が優しい人なんだって気付いた。後輩に向ける瞳が、宝物を見るような瞳だったから」
優しい目をしてるのはどっちだろう。私がしてたのかな、先生みたいな、優しい瞳を本当に。
「だからね、ホシノ。私はね、君が思ってることが聞けて……君に頼りにしてもらえて、私は嬉しかったよ」
まるで宝物を眺めるような慈悲に満ちた瞳をするこの人は、かつて信じていた大人の

姿そのものに見える。こんな綺麗な人が、心の優しい人が居るんだ……。
「他でもないホシノに私を信じてもらえていたことが、本当に嬉しかった」
私の手を優しく包み込んでくれる手のひらは、私より二回り以上大きくて身を委ねたくなる。単純な力は私たちよりないかもしれないけど、先生は人として頼りにしたくなる力があるんだ。
「ね、ホシノ。私の顔を見て」
「……うん、見てるよ」
「これが、君には無駄に思えるかい？」
思えなかった。優しい表情をしてくれてるから、そんなこと思う余地がない。
「……無駄じゃないんだよ。君が頼ってくれて、私はこんなにも、嬉しいんだから」
握ってくれているのとは逆のもう片方で頬に手を当てられる。こうされると、なんでだろ。不思議とドキドキしちゃう。涙で視界は滲んで、もう先生がちゃんと見えなくなる。
「もう、自分を責めちゃだめだよ。すぐには難しいかもしれないし、無理だろう。でもさ、私も一緒に手伝うから……」
「先生も、言わないでよ……！」
最後まで聞く前に、胸の中で感情が爆発してまるで子供みたいに先生の胸に飛び込ん

で抱き締める。先生はびっくりして固まってた。それでも気にしない。気にしてる余裕なんて今の私にはない。私の知ってる数少ない言葉で、つたえなくちゃ……。

「ダメだなんて、もう言わないで……先生は私を救ってくれた。ダメな人なんかじゃ……ないから……。私も、頑張るからぁ……！」

もうあなたが自分を卑下するのなんて見たくない。私がこんな気持ちを抱く人は、あとにも先にもあなただけだろうから。

この気持ちがなんなのか分からないけど、こんな気持ちにさせたあなたが悲しそうにしていると私も悲しくなっちゃうから。

「だから、もう言わないでよぉ……」

「……うん、そうだね。ありがとう、ホシノ。一緒に頑張ろうか」

「約束だよ……先生……」

泣いてる顔を見られたくなくて先生の胸に顔を埋めているせいでどんな表情をしているか分からないけど、きっと優しい顔をしてくれてる。

だって、こんなにも心が安らぐんだから。ほんのりと香る香水の匂いと、それに混じる知らない匂い。

その日からあの人のメガネを、心の仮面（ペルソナ）を？がしたいと思うようになったんだ。だって、その方が素敵なんだもん。人としても、私個人のこの気持ちをぶつけるのにもその

方がいいんだから。だから、そう。あの日素を見せてくれたあなたを私はずっと忘れられないよ？

覚悟してね、先生。

「そう思ってたのが随分前に感じるなぁ……」

「お前、人をベッドに引きずり込んでおいて当人置き去りで考え込むなよ……」

「え～？　だって、落ち着くんだもん」

前は分からなかったけど、香水に微かに混じってたのはタバコの匂いだった。他の人のだと嫌な気持ちになるのに、先生の一部だと思うと優しい気持ちになれる。あの時はこんな風に一緒のベッドに入って同じ時間を過ごせるなんて思わなかったのに、人生って不思議だなぁ。

「そうですか……よかったっすね……」

「疲れた声出してるのに嬉しそうだよ？」

「そりゃ、彼女の安らぎになれてるなら彼氏冥利に尽きるだろうよ」

「あ……え……」

「意趣返しだ。お前が悪いぞ？」
「だって……」
　そんな嬉しいこと言われたら、女の子はしどろもどろになっちゃうものでしょ。……そう、だよね。私がチョロいわけじゃないよね。チョロい女の子だと思われるのは嫌だし……。
　悩む私を見て面白がって笑う彼氏さんに頬を膨らませる。こっちは真剣に悩んでるのにさ。
「先生って、女泣かせだよね」
「ダメ人間の上に女泣かせって人として終わってるだろ……流石にへこむぞ俺」
「でもね……だ、大好きだよ……？」
「あー……。俺も、好きだぞ」
「ほら、愛の証は？」
「……俺、お前の方が悪女だと思うわ。男をダメにする才能がある」
「先生限定の、ね～？」
「シラフだよなぁお前……？」
　餌をせがむ小鳥みたいに胸へと擦り寄ると、仕方ないと言わんばかりに溜息を吐いて、額にキスしてくれる。

嬉しい……けど、今欲しいのはそこじゃない……って不満な顔をしてるんだと思う。彼はもっと面倒な顔をしてから顎に触れて、唇へとキスしてくれた。

あの時は頬だったけど、今は唇。本当に、想像すらしてなかったけれど。今は……うう。ずっと、この関係性を大切にしたいな。

こすぷれ／やどりぎ

「執事服ゥ……？」

正気でも失ったのかと怪訝な目を向けてみると、首を全力で振ってタカナシは否定する。

「いやいや……違うよ～。この前メイド服の子を見かけてさ～？」

「お前、『男版メイドなら執事でしょ』って話なら頬引っ張るからな……」

「……」

「お前はなぁ、単純がなぁ、過ぎるんだよなぁ、分かってるかホシノなぁ！」

「ひあいひあい（いたいいたい）」

タカナシの頬は付き合う以前と比べて、妙にも艶と肌触りがいい。恋する乙女の努力というのは素晴らしいものだ。こういうのは胸の内にしまって噛みしめておこう。褒めてもいいが、スキンケアに関しては最低限しかやっていないせいで褒めるボキャブラリが皆無だ。

精々がやってることは化粧水に美白美容液に乳液に……こう考えると割とちゃんとしているかもしれないと思ったが、女性のソレに比べれば大したこともないと思い直

す。

　それにしても、執事服か……。

「普段からスーツ着てるんだから変わらないと思うぞ？」

「全然違うよ。先生は顔が整ってるんだから、執事服なんて着たら今以上にイチコロだよ！」

「お……おう……」

　普段のゆったりとした表情を崩して迫ってくるタカナシは戦闘時以上の迫力がある。執事服はないわけではない。

　ミレニアムのメイドたちを見たときに彼女と似たようなことを考えて購入したはいいものの、ただのコスプレであることに気が付いて以来ほとんど役割を果たさずに自室の隅に追いやられた。

　それ以降幾度となく自己主張してきたが、それをやっている時間もヒマもなかった。

「……あんまり乗り気じゃない？」

「いや……アリスに着せられたことがあったから別にそうでもないが」

　アリスというのはミレニアムに居るゲーム開発部の子。天真爛漫で日々成長が目覚ましい子ではあるが、一般常識が欠落しているせいでとんでもないことをたまにする可愛らしい困ったちゃん。いい子ではあるからなぜそうしたのか聞いた上で修正してや

れば同じことはしないが……。
　そのやらかしのうちの一つがメイド勇者だとか言って世話をしてくれた時に服を？ぎ取られた挙句に着せられた執事服の一件。アリス以外にも早瀬だとかが訪れていた記憶があるから証言は取れるだろう。
　そんなことを考えているとぐりぐり、と胸元に愛おしい顔が擦り付けられる。
「どうしたんだタカナシ、まさか自分は見れてないからって拗ねたわけじゃあ……」
「う～……！」
　図星のようで、ただ唸ってこちらを見上げてくる。本人は睨みつけているつもりなのかもしれないが、涙目のせいもあって上目遣いでおねだりされているようにしか思えない。緩みそうになる口をなんとか固定させて背中を叩く。
「ほら、着てくるから一旦離れろ」
「……一緒に行く」
「お前、肌見たら固まるだろ……」
　付き合っている男女なら着替えくらい気にしなくても構わないだろう。そう思ってタカナシを外に出さずに着替えている最中、熱心に視線が注がれて正直居心地が悪かった。気にしないとは言ったが、じっくり見られるとマズイことをしているかのような感覚に陥る。

何度も目の前で着替えているが、困ったことに慣れてくれないようでならば追い出そうとすれば拗ねる。困ったものだと笑みが零れるが、コスプレするときは役に入り込むのが重要だ。その過程で緊張とかの不純物が入り込むといざ演じるときに恥じらってしまう気がする。

だから剥がそうとタカナシの両腕を手で握ると、ほんの少しだけ表情が歪む。

「私が一緒に居るのは、嫌かなぁ……？」

「はいすみません俺が悪かったです一緒に行きましょう」

脆弱すぎる意思をどうにかしたいが、まぁ無理だろうと諦めてクローゼットの奥にしまい込んでいた服を引っ張り出した。

「おぉ～……！」

「……」

身に付けたのは黒のスラックスにジャケット、ダークグレーのズボン足元には革靴とシンプルに纏める。流石に自分で購入してきたものだから体格に合わせたデザインになっており、白手袋をゆっくり嵌めれば鏡に映った自分が思っていたよりそれっぽく見えていることに驚く。

以前着させられたときは自分の姿をわざわざ見なかった。

加えて、オールバックにするのではなく、髪の一部を後ろに撫でつけてスッキリしている。普段付けているメガネもコンタクトに変えていることも関係して先生としての姿と俺個人、どちらとも結びつかない。
「似合わないか？」
「……この反応を見ても言うかなぁ」
「あー、そんなに？」
タカナシからの熱い視線のせいでどうにも居心地の悪さを感じてどうしたものかと悩む。期待通りの反応を返してくれるのは嬉しいのだが、全肯定されるのも気恥ずかしいものがある。
「どう見えてんだ」
「えっと……いつもよりその、い……色っぽい……かな……」
「普段とほとんど変わらねぇだろ。普段より着込んでいるくらいだぞ」
「いやいや……やっぱり他の子に見せちゃダメだよ～？」
相変わらず上目遣いでもじもじしながら見上げてくるタカナシはそう言ってくるが、俺としてはその逆で、その表情を誰にも見せたくはない。
「そっくりそのまま返す。その顔はよくない」
「へ？」

「魅力的すぎる」
「……うへ」
今の言葉が気に入ったのか、嬉しそうに枝垂れかかってくるタカナシに苦笑を返して髪を撫でる。決して傷つけないように慎重に。
傷付いた人間を救えるのは痛みを分かる人かもしれないが、分かるからと過信して間違うわけにはいかないんだから。

やどりぎ

半ば居候のような形になっているタカナシに対して苦言を呈する機会を伺っているうちにいつの間にか季節も過ぎて秋口に入っていた。少し前まで茹で上がるような熱さに晒されていたのに気付けば過ごしやすい空気が肌を撫でる。
秋口はよくカーディガンを羽織る。スーツでカッチリ決めるのが先生としての姿ではあるが、ジャケットは些か暑すぎて汗をかいてしまう。制汗剤などでどうにかなるかもしれないが、汗が流れてしまうというデメリットが強い。
以前ブラックマーケットに押し入った際になくなったはずの私物が見つかったこと

があった。それ自体はカフェに忘れてしまったことが原因だったのだが、私物がなくなったのはそれに限った話ではなく、盗聴器も仕掛けられたこともある。次はないと暗に諭した上でアロナに頼んで自前のセキュリティを導入してからはそういったこともなくなった。

ただ、いい天気であっても外に干せば私物が消えるので基本的には室内干しになってしまう。ここ何階だと思ってんだよおかしいだろ。ラペリングでもしてんの？

――そんな経緯があるため、タカナシの手の届く範囲に服があるわけだ。

「……なんで俺のカーディガン着てんだよ」

いつも通りキヴォトス内の問題を片付けて自室に戻るとタカナシが俺のカーディガンを羽織っていた。

秋口とはいえ、換気を適度にしないとニオイが籠って嫌な気分だろうと干す位置を移動させるように頼んでいた。だから、洗濯物の一つであるカーディガンを手にしているのは問題ない。流石に羽織っているのは想定外にも程があるけれど。

「あ、え～っと……」

「ああ」

「ちょっと出来心が……ごめんなさい……」

「怒ってはないんだがなぁ」

震えた声で謝られると困る。責める意図はないし、ただ純粋に疑問になっただけで。
「なんで着てたんだ？　物珍しくもないだろ」
部屋で力を抜いてゆったりするときはカーディガンと読書用の伊達メガネを着けるクセがある。だから、この淡いカーキのカーディガンは何度も羽織っているはず。
「洗濯もの触ってるときにさ、先生の服見たら大きいなって思ってつい……」
「なるほど……？」
あれだろうか、好きな人と同じものを使いたくなる現象と同じだろうか。一応秋口になってから帰り路で何度か気温が下がって服を渡したことがあったはず。着たのが先生としての服装なので、私物として使用しているものとはまた別の気持ちなのかもしれないが。
「んで？　着てみてどうだ？」
「え～……それ、掘り下げる？」
「気になるからな」
他人の服を着込むという経験は中々ない。人に、主にタカナシの体温調節のために持っていることはあるが、人から借りることはないし、借りたくても体格がこちらの方が上なのでどうしても貸してもらうわけにはいかない。
筋肉モリモリの男が着込むことによるシワが好物という女性がこの世の中には居る

らしいが、細い人間がそれを真似たところでみすぼらしいだけである。

あれは自分の良さを把握したうえで活かすことで輝くのであって、模倣したところで贋作以下でしかない。

「その、大きいなぁって。いっつもこんなに大きな身体に抱かれてるんだなぁって」

「……おう」

抱かれている、という表現に意図するところはないのだろうが、唐突に呟かれたひとことに心臓が跳ねあがる。動揺の原因であるタカナシは、はにかむような笑顔を浮かべていてその表現をやめろということも出来ない。

身長の割には上背があり、丈は長いものになる。一方で、タカナシの身体は華奢で背丈が低い。二人の間には体格差があるため、タカナシが俺の服を着ると丈があまってダボっとした印象がある。当人の言動的に合うため、どうしても油断すると可愛いという正直な感想が出そうになる。

ダボっとした袖をまくるでもなくそのままにしている彼女は普段とは別の表情を浮かべていることもあって絵になる。好いている女性が自分の服を着ているという状況も、正直な言葉が出そうになる心に拍車をかけていた。

肩を縮めているタカナシになんとも言えない微笑ましさを感じながら眺めていると、生暖かい視線に気が付いたのか、抗議の視線が飛んでくる。

「お、おじさんになにか言いたいことある……？」
「いや、謝りながらずっと着ているから気に入ったんだろうなぁって思ってな」
「そ、そうだけど……」
「そんなに気に入るならやろうか？」
カーディガンは何着も持っているし、特に困ることもない。流石にジャケットと言われると外向きの服が違うことに気付かれる可能性が高いせいで渡せないが。
冗談めかして問いかけると、宝物を得た子供のように無邪気で優しい笑みを浮かべる。
「じゃあ、もらうよ？　いいの？」
「おう。大きいと思うから部屋着にでもしてくれ」
話が落ち着いたところで、いつも通りベットに腰掛けてからタカナシを持ち上げて膝の上に乗せて話始める。彼女が大きいと言ったこの身体が彼女の宿り木になるように祈って。

やさしさのきおく

死んだ人間が与えるその後の人生に与える影響、というのはそれぞれの関係性によるものはあるが、少なくとも近しい人間を失って平静であれる人間は居ない。その瞬間に涙を流さなくとも、心のどこかにヒビが入ってしまう。

男は初恋を引きずるもの、なんてよく言われるものだが、それと同じくらい、もしくはそれ以上に引きずってしまうのが人の死というやつだと思う。

だから、どれだけ自分が嫌なやつだと実感することがあっても誰かを置いていくような真似はせず、もしそんなことがあると事前に分かっているのならば……相手を拒絶して自分に関わる価値がないことを知らしめた上で、誰にも悟られない形でひっそりと幕を閉じるのだろうと、そうぼんやりと考えることがある。

この思想を誰かに話したことがあった気がする。あれがどういう話の流れだったのか、そもそも誰と話していたのか……今では思い出せない。

「うーん。誰かを失ったこと、私はないから分かんないや」

「誰も失ったとは言ってねぇんだけど」

「仮定の話？」

「そう、仮定の話」
外の世界で何があったのか俺はもう覚えていない。それでも、このおぼろげな記憶でもなにかしらの背景があったことだけは覚えている。そうはいっても、この発言の意図が分からない以上どうしようもないのだが。
どうせ夢ならば都合よくあってほしいものだ。
現実はいつだって辛いものなのだから。
「でも、先生が優しいことだけは私が保証するよ」
「いや、優しくなんてねぇよ。自分が誰かに一生の傷を負わせてしまったという責任から逃げているだけだっての」
「そっかそっか。でも、これだけは言える」
「……んだよ」
「それは優しいかもしれないけど、どうしようもないくらいに不器用だよ先生？」
「ほっとけ。連邦生徒会長」
笑いあったはずの日々だけが、ただ漠然と胸の中に残っている。

「先生、最近調子よさそうですね？」

「リンちゃんからはそう見える?」
「ええ。あと、誰がリンちゃんですか」
連邦生徒会本部での意見交換を終えてぼんやりと窓の外を眺めていると、ぎこちなさを感じさせない自然さで隣に立たれる。あまり近くに立たれると、気を付けているとはいえタバコのニオイがしないとも限らないので離れてくれると嬉しいが、それを言ってしまうと勘付かれる可能性が高いため黙っている。
時折、女性はこちらの考えていることを手に取るように把握してくることがある。さながらエスパーのようにも思えるが、彼女らの観察眼がそれほど優れているのだろう。
もしかしたら自分が分かりやすいだけかもしれない――そんなことを思って思考を振り払う。これでも超法規的機関、シャーレの先生であり、ポーカーフェイスは得意であるという自負もある。バレるはずがないのだ。
「そうは言っても心当たりなんてないんだけど……」
「そういえば、小鳥遊ホシノさんが専属当番になった件について、その後どうでしょうか?」
「特に問題はないよ。……なんでその話を?」
自分で淹れた紅茶を飲みながら思考を回す。街中で専属の当番にすることをリンちゃんに宣言したのは俺だ。だから聞かれること自体は問題がない。ただし、それから

何度も仕事を一緒にこなしているにも関わらず、なぜ時間が経った今聞いてくるのだろうか。

その言葉の真意が計り知れない。もちろん、お互いに味方だから害意がないことだけは分かる。だからこそ分からない。シャーレに来てからは害意により敏感になった。

全ては生徒たちが自分の道を行けるよう、自らの道を示すために。

だから、自分が周囲からどう思われているかには敏感であったはず。それなのに分からないという事実に嫌な汗が伝う。

「……驚きました。そんな顔をなさるんですね」

「どんな顔？」

「いつものやんわりとした笑みとは違う、大人としての顔です。先生のことはもちろん信頼しています。ただ、普段の印象が強いので」

「頼りないと思われているの悲しいね……」

出来る限り優しい雰囲気を出せるように言動には気を付けていたつもりだが、それはそれで胡散臭さや、裏がないかどうかを警戒されてしまう。なら逆に本来の性格で心を開こうとすると乱暴になってしまい、相手のことを気遣えない。

二者択一しか選べないことに渋面を浮かべて瞳を伏せる。物事の中間を取れる才能は俺にはない。中途半端になるのが関の山だからだ。

「話が逸れたね。彼女は上手くやってくれているよ。私が必要なことは任せられないけどね」
「いえ、それを任されても困るのですが……ともかく、上手く行っているようでなによりです」
「……言葉だけだとは思われないんだ？」
「表情を見れば分かります。なんだかんだで私たちは長い付き合いになりましたから」
自分の顔を触りながら、付近にある窓を見る。僅かに反射した醜い顔は、なるほど確かに。普段に憎たらしいほど透明感のある顔付きとは別物で、少しだけ温かみのある表情になっている。
これは本当に、俺なのだろうか。
「……本当だ」
「ご自覚なかったのですか？」
「……全く。そっか、これは……気付かれるかもしれないね」
これは、シャーレの先生としての顔ではなく、特定個人を慈しむ男の目だ。全てを犠牲にしてでも、一を生かすことを厭わない人間の目だ。時には自分自身すら犠牲にしてしまうような、そんな危うさを宿している。
戻す必要があるかもしれないが……この道は片道切符だ。あの子の手を取った時点

で、覚悟は決まっている。間違っても手を離したりはしないと決めているのだから、戻る選択肢はない。

少しだけ、脳裏にノイズが走って知らないはずの後ろ姿に動かされそうになるのはきっと気のせいだろう。気のせいでなければ、俺はなにかを忘れていることになるのだから。

「ええ、でもそのままでもいいのではないでしょうか」

「そうかい？」

「ええ、今の方が親しみを持てますので」

「……遠回しに人間っぽくないって言われていないかい？」

「いえ、特には。ご自覚がおありで？」

「いい性格しているよね、本当に。ただの真面目ちゃんだと思ってたのにさ」

「どこかの優男のせいかと」

「はて、誰だろうね」

かわれている？

「先生、最近すごくカッコよくなりましたよね～」

そう言ってニコニコとお茶を出してくるのは十六夜ノノミという少女。淡い髪にふんわりとした言動がよく似合う少女。よく世話を焼きたがる彼女は小腹が空いているとみるや否や料理を振舞ったり、ソファで仮眠を取っていたらいつの間にか膝枕をされていた、なんてこともあった。

ようは童貞絶対殺す（勘違い製造機）ウーマンである。こんな女性に学生時代に会っていたら……と思うと寒気を覚えずにはいられない。世話好きで、天真爛漫でそれでいて考えられないわけではなく、必要であれば自己犠牲する。目を離せないおてんば娘の側面を持つ彼女は、異性が居る学園であればさぞ好かれたことだろう。

本人にその気があるのかは別として。

「そうねぇ……ちがっ。今のは先生が色っぽくなったとかそういうんじゃない！」

盛大な自爆をして一人でお祭りをしているのは黒見セリカ。黒い髪に赤い瞳、その上でツンデレキャラをしているのだからラノベなどにおけるお約束のような人物である。ツンデレは近付くまでに大変なことが多いのだが、彼女の場合はそんなことがない。む

しろ人を信じすぎるあまり、騙されることが少なくないため自分を律する意味でああいう性格になったのかもしれない。成果があるかどうかは……ノーコメントになるが。

「あはは……でも、底が知れない感じはなくなりましたよね。今の先生の方が話しやすいかもしれません」

苦笑しながらも自身の意見を述べているのは奥空アヤネ。黒いショートヘアに黄色の瞳を持つ普通の女の子。後方支援に徹する彼女が保有する能力は、戦闘のみに絞れば大したことはないが……他人が求めているものを的確に与える聡さを持っている。努力家でもあり、各方面で頑張っている様子が散見される。

よく出来た子ではあるが、歳相応の面もあってからかうと一番恥じらってくれるのが彼女だ。叩けば鳴る、ではないがからかい甲斐のある女の子でもある。

そんな女性三名に囲まれて苦笑いをしている放課後の時間。逢う魔が時とも表現されるこの時間は、花の女子高生だけで帰らせるには少々心配になる時刻でもある。はてどうしたものか、と頭を悩ませ始めたあたりで始まったのが先の会話だ。

「いや、それだと私がこれまで底が知れなかったみたいな……」

「うんうん、先生は私たちのためにいつも頑張ってくださいますから、こういう大人が居るんだって、正直びっくりしてたんですよ～」

今でこそ当然のことって警戒しなくなりましたけど、といたずらっ子のような笑顔で

ウィンクしてくる彼女に困惑する。いや、考えてみれば無条件で味方してくれる存在などこの世界に居ないのだ。それぞれが自分なりのメリットを相手に見込んで付き合いを続けていく世界で、大した信頼関係も築かずに助けてくれる、なんて虫のいい話はこの世界にはないはずなんだ。

作られたものであれば話が別だろうが、そういった偽善は疲れて道半ばで閉ざされてしまう道だろう。本当に貫き通すのならば、なにがあっても立ち止まらないという覚悟を持って仮面を付けるしかない。

それが出来るのは、生まれながらのバカか底抜けの善人だけだろう。人の悪意を知って、それでも信じ抜けるのは生半可な覚悟で務まる重責ではないのだから。

「もちろん、悪い意味じゃないですよ。先生が頑張ってくれてるのは分かってますから」

「頑張っているのは君たちだよ。私はそのサポートをしているだけ。君たちがいなかったらなにも出来てはいないのだから」

俺自身はなんの力もない、一度は大切な人間の手を離してしまった人間だ。ならば、俺がやってきたことは所詮は偽善で、他人として接してきたからこそ出来たことに過ぎない。アビドスも、ミレニアムも、エデン条約の話も。

自分の手元に辿り着いた瞬間、どうすればいいのか分からなくなる。せめてお互いが傷付かないように、突き放すことしか出来なかった。それが、以前の自分で。今マシに

なっているのなら、もしかしたら変われているのだろうか。
　なんて。そんなことを以前も考えたような気がするなとぼんやりと考えていると、急に頭を撫でられる。
「……ノノミ、人の頭を撫でないようにね？　一応大人だからプライドとか邪魔するかもしれないでしょ？」
「先生は気にしないタイプでしょう～？」
「いや世間体は気にするけど」
　なんというか、大きい子供だと思われているのだろうか。必死に自分の守りたいものを守っている様子は子供のようだと自覚出来ているが、それ以外で思うところは――経費として自分の玩具を申請することが子供でないか、と言われると口を噤むけれど。
　あと、こんな様子をタカナシに見られたら……そう思って横に視線を向けると今一番居てほしくない人物が居た。
「……」
「……やぁ」
「呼ばれて、せっかく来たのに。いちゃいちゃしてるのを見せつけるんだ～へ～……」
「えっと……？」
　ああ、なんで地獄への片道切符になると考えられなかったんだろうなぁ。苦笑しなが

ら謝罪の言葉を考え始めた。

「もー……先生っていつもああだなぁ……」

アビドスのみんなを駅まで送るって言って出てからずっとそんなことを考えてる。そりゃ、シャーレの先生として振舞っている時はみんなにいい顔をしないといけないし、強く言えないって分かってるよ。そもそも、あの人が強い言いかたを出来ないのも含めて。

でも、それとどう感じるのかは別なんだ。自分の中でグツグツと、マグマの音が聞こえる気がする。すごく、嫌な気持ち。これは先生が悪いわけじゃなくて私の感じ方の問題なんだって。

余裕みたいな表情を保つことだけ考えていた自分がバカみたい。こんなにも、嫌だって気持ちで溢れてるのに、それを無理やり抑えつけて自分の気持ちに蓋をしてる。先生なら、あの人ならちゃんと受け止めてくれるんだって分かっているのに、心のどこかではあの人にこれ以上迷惑をかけるわけにはいかないと思っちゃってる。

あの人は色々なことを背負いすぎてる。不器用な優しさと気遣いで塗りつぶされた本音は、きっと私には見せてくれない。それが寂しい。あの人の隣に居るはずなのに、

そのはずなのにどうしようもなく遠い。

「……うん、決めた」

あの人が帰ってきたら、ちゃんと寂しいって言おう。言わなければ伝わらないって言ってたのはあの人だ。だったら、ちゃんと伝えないと。それだけを頭の中に決めて、先生の布団に沈み込む。自分の身体を包むように布団を被ると、あの人の優しい匂いがした。

ここに居れば、あの人の優しさを感じることが出来る。私だけに向けてくれた、あの視線が。

第三章：「誰がための想い」

おとをたてて

「先生の子供のときって、どんな感じだったの？」

「俺が子供のとき？」

俺が子供のとき、かぁ。どうだっただろうか。正直なところ、キヴォトスに来る以前、どのような場所でどのような人生を歩んできたのか正確なところは分からない。それは過ぎ行く日々の中で擦り切れてしまった心のように取り返しのつかない要素であったようにも思うし、昨日の朝食のようにどうでもいいことでもあるかもしれない。

記憶がないといえば都合はいいが、そこにあった感情だけは覚えている。あれは……そう。

「いや、ロクな子供じゃなかったぞ。世の中を擦れた目で見て、希望なんてどこにもないんだって頑なに信じてた」

世間的に言うところの諦観というやつだったのだろう。ちょっと背伸びをした子供がただ少し、現実を見ただけでこれまでの全てを否定され、この世界で一番の不幸者なのだという目をしてしまう、そんな子供だったのだろう。

きっと、たいした出来事でもなかった。それでも思い浮かぶのは、やりきれなかったという想いとそういう目をした後輩を少しでも減らしたいという妄執に似た感情だけ。

どこか遠い目をしていた少年時代、どこかで道を正せていたのならここまで捻じ曲がった性格でもなかったのだろうし、真っすぐ生きられたような気もする。

ただ、それがなければ今はないのだ。困ったことに、取り返しのつかない間違いですら今に繋がる大切な鍵なのだから。胸中に渦巻く黒いモヤのようなものを静かに押さえつけて、悟られないように苦笑を返すと、やんわりとした笑顔を返される。

「う～ん……おじさんの昔みたいなものかなぁ」

「さて、俺の過去なんて君の経験ほど苦難に満ちたものじゃねぇさ」

俺の世界では傷付くことは当たり前じゃなかった。軽率なほど繰り返される銃撃戦は彼女らの身体であれば耐えられるものであるのかもしれないが、彼女らの視点を自分の世界に当てはめればメインストリートで拳が飛んでいるようなものだ。それが自分の世界であったのかと言われればまた別の話である。

加えて、本人は言わないがおそらくこの子は誰かを喪っている。誰かを喪ったことのある瞳がそれを決定的なまでに印象付けている。

傷付くことは当たり前、でも死には至らない。そんな当たり前が存在する世界だからこそ、心のどこかでこう思う。人が死ぬことは当たり前ではない。

頑丈だからといって性暴力が横行することもない。俺の世界とはまた違う。妙な倫理観がこの世界を包んでいる。

「やだなぁ。おじさんだってそんなに苦労してないよ～？」

「……んー。そうだな」

頭をわしわしと髪が乱れるくらい撫でてやると、うへぇと呻きながらもこちらに身を寄せてくれる。

「ホシノ、お前は諦めないでくれよ」

きっと、俺は一度諦めた。胸中にある何かを為さんとする支柱はおそらく善意に満ちたものではなく、むしろその逆。艱難辛苦の果てに見た景色が瞳に焼き付いて離れず、自然と諦めて、擦り切れてしまった男の後悔。それを起点としてもう一度だけ立ち上がる勇気をもってこの世界に降り立ったときに決めたこと。

絶対にあきらめない。覚悟とあきらめは良く似ている。どちらも自身にとって最良の結果のためになにかを切り捨てる腹を決めること。なら、捨てた未来はどうなったのだろう。

覚えていないということは、自身にとって重要でないと切り捨てた末の決断だろう。

この人格を形成した少年時代とは、なんだったのだろう。

「もちろんだよ。先生と一緒に居ることは諦めない」

「……お前なぁ」
嬉しいことを言ってくれる。
日常の中の会話の一つであったはずの少年期の話。つまりはここに来る前のことだが、そんなことなんて分からない。恋人が居たのかもしれないし、どのようにこの世界に来たのかも。
ただ、知る由もないのであれば存在しないのと一緒だ。今大切にするべきなのは、この世界と隣に居るこの子だけ。それ以外のことはどうだって、なんだっていい。
この時は、そう思っていた。

きっかけは、単純なことだった。いつも通り試験管で薬品実験をする生徒の被検体となっていた時のこと。失敗ばかりの薬品だからと高を括ったのが間違いだった。しばらく放置していたのだから、工作されていてもおかしくなかったのに。
「うぐ……」
薬を体内に入れてから、急激に身体が熱くなって、段々と記憶が消えていく。いつも居るホシノはどこにも居ない。彼女が居たところで、助けを求められもしないが。
「まったく……こんなことなら、手を出しておくべきだったかもなぁ……」

腹部に銃創を作った時のような熱っぽさが次第に強くなっていく。意識も限界に近い。

そうして、シャーレの先生であった成人男性は姿を消した。

「う～ん……幸せ、だなぁ」

対策委員会でどうしてもやらないといけないことを片付けて、シャーレのフロント部分をすり抜ける。好きな人と一緒に居られるのって、こんなに幸せなんだって初めて知った。少女漫画なんて読まないけれど、好きな人はきっとこういう気持ちに憧れてて、そういう気持ちに憧れるのも分かる。私はきっと、知らなかっただけなんだから。

ずっと家に置いてあったぬいぐるみを持ってきた。どうせこっちに居るんだから、こっちに置いてた方がいいもんね。

鼻歌を歌えそうなくらい上機嫌で、プライベートスペースのロックを解除する。

この場所は二人の時間を邪魔されないようにって先生が用意してくれた場所。元々は先生だけの場所だったみたいだけど……そんな場所を共有してくれたんだって、心があったかくなる。

「せんせー。来たよ～……？」

いつも通り、優しい笑顔の先生が迎えてくれると思ってた。でも、そこに立ってるこの人は。

先生とよく似てる。でも。表情も、雰囲気も……目の色も。なにもかもが違う。

「……なんだお前。誰だ？」

その現実を、目の当たりにして。抱いていたぬいぐるみを落とす。まるで……私の絶望を、表しているかのように。